滋賀県平和祈念館 第21回企画展示

戦場より故郷の家族へ　ー戦没者の手紙ー

（会期：平成30年9月30日～12月24日）

チラシ表面

チラシ裏面

ごあいさつ

昭和時代の戦争では、予備役として郷里にいた多くの男性が戦場へ動員されました。すでに一～二度の兵役をすませた方や、徴兵検査を受けながらも、くじや事情によって入隊を見送られていた方々です。20歳代半ばから30歳代にさしかかった彼らは、結婚して子をもうけ、父母を養っていく、家族の大黒柱として期待された存在でした。

今回は、こうした方々が戦場から故郷の家族に書き送った手紙を紹介します。紹介した方のほとんどは、この手紙のやり取りのあと、戦場で亡くなっておられます。お国のためのご奉公でありながら、郷里の家族に残した彼らの想いを感じとっていただければ、と思います。

最後になりましたが、亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

平成30年9月30日

滋賀県平和祈念館

バナー写真：奥島すみ子さん提供

プロローグ　軍事郵便

軍事郵便は、戦地や占領地の軍人と、内地に住む家族とのあいだでやり取りするための郵便です。送料は無料で、封筒やハガキに切手や消印はありません。

軍事郵便は軍によって内容が検閲され、地名や悲惨な状況は書けませんでした。しかし、日中戦争期に出された手紙には、戦闘内容や戦場のようすを詳しく知らせている例も見られます。

発送できる数には制限があったようで、紹介した西村浅吉さんは月に2通まで、と書いています。しかし、Tさんのように毎日のように送っている例もあり、派遣地の事情によって違いがあったようです。

郵便物が届くまでの時間も場所によっては違ったようで、ニューギニアにおられた西村浅吉さんのハガキに記された書付日と着信日から、到着に2～7か月を要したことがわかります。文面で家族からの手紙が届いたことを知らせているのはこのためでしょう。

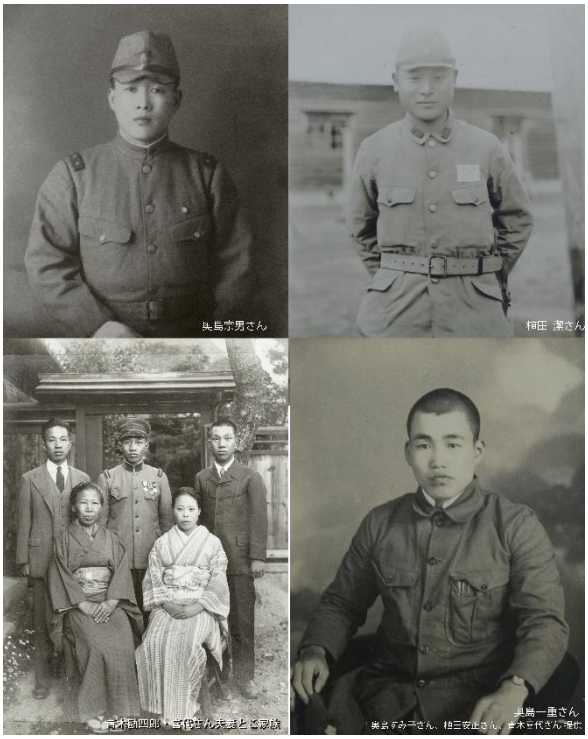
戦地の将兵にとって家族からの手紙は、何ものにも代えられない慰めでした。戦地から送った手紙は、定型的なあいさつだけで健在を知らせる方、異国の風土や戦場・兵舎での出来事を克明に知らせる方、郷里を懐かしみ、家族やご近所の動向をたずねる方、家業の心配をする方など、じつにさまざまです。こうしたやり取りで、家族のきずなを深めていたといえるでしょう。

右上：軍事郵便封筒（未使用）

上記以外：軍事郵便絵ハガキ「恤兵絵葉書」（未使用）

上下とも：『写真週報』第45号

内閣情報部、昭和13年12月21日発行



バナー写真：左上　奥島宗男さん（奥島すみ子さん提供）

右上　植田　潔さん（植田安正さん提供）

左下　青木勘四郎さん・喜代さん夫妻とご家族

（青木喜代さん提供）

右下　奥島一重さん（奥島すみ子さん提供）

インドネシアより家族へ

Ｓさん（愛知郡愛荘町出身）

◇京都丸紅に勤務。

◇昭和16年3月、結婚。一女をもうけた。

◇昭和18年7月に召集を受ける。

◇舞鶴海兵団で1ヶ月の訓練のあと、インドネシアに派遣。

◇次女誕生。

◇昭和20年7月1日、ボルネオ島バリクパパンにて艦砲射撃を受け、戦死。

展示の手紙は、3通ともボルネオにいたＳさんから。長男のＳさんと次男、三男はみな出征され、故郷へ帰ってこられたのは次男だけでした。

遺族である奥様から提供いただいた手紙には、村の行事、娘の成長、家族の健康を問うとともに、ご自身の無事を知らせています。

手紙：インドネシアのＳさんより　両親あて

（昭和十八～二十年）

拝啓　みなさまご壮健のことと存じます。私もおかげであいかわらず元気ですからご休神ください。

さて、昨日■君より便りがありまして、同君も元気のよし、なお[次男の名前]応召の●きを知らせてくれました。家の方からもご通知ねがったことと思いますが、まだ着きません。すでに予期いたせしことにて、時節がら当然のことと存じます。

いよいよ兄弟三人ともにご奉公できる時が来ました。家の方では何かとご心配にもなりましょうが、体にもさわることですし、元気ですからあまりご心配のないように！

常夏の地のこととて、太陽の下ではかなりの暑さを感じますが、陰に入れば内地では想像のできぬほどすずしく、比較的しのぎやすい所です。

今のところ、航空郵便の持ちあわせがありませんので、今後も普通便になりますから、さようご承知ください。

ご無沙汰いたしておりますが、■宅によろしくお伝え下さい。

ご両親はじめ一同のご健勝をお祈りいたします。

敬具

手紙：インドネシアのＳさんより　両親あて

（昭和十八～二十年）

拝啓　内地ではボツボツ桜の散るころと存じます。

あいかわらずみなみな壮健のことと喜んでおります。小生もおかげさまにてからだは至極健康ですから、なにとぞご放念ください。

お送り下さいました薬、まさに入手いたしました。

お心づかいの数々ありがたく存じます。さいわいほとんど傷まずに着きました。さっそく戦友とも分けあって久しぶりに内地の味を味わいました。あつくお礼申しあげます。

昨日着いたのですが、確か川並の祭礼の日だと思います。

[長女の名前]の写真、ありがとうございました。あいかわらずよく太って丈夫そうですし、母も元気な顔つきに見うけられ安心いたしました。

おかげさま同送くださいましたお供物ありがたくいただきました。おかげさまでからだは健康ですから、ご安心下さい。入

団当時から比較すると、今日では体重が増しました。
なお本日、俸給の一部をお送りいたしましたから、さようご承知ください。
[妻の名前]、お世話さまながら、よろしくお願いいたします。
まずは●手ご通知●と、健在おしらせまで。

敬具

Ｓ　拝

ご両親　様

手紙：インドネシアのＳさんより 両親あて

（昭和十八～二十年）

その後は久しくご無沙汰いたしました。だいたいのことは▲▲よりお聞きくださったことと存じますがいろいろとご心配のことだったろうと思います。さいわいに至極壮健にてご奉公いたしておりますから、なにとぞご休心下さい。
家の方もみなさまお元気でいてくださることと安心いたしております。
今日は確か小学校の運動会だと思います。まもなく松茸も出まわりましょう。こちらでは口に入りませんが、別に不自由なものもなく、元気でおります。軍隊なればこそです。
[長女の名前]もおおかた大きくなったことでしょう。少しは言葉も話せるようになったでしょうか。おりにふれ成長ぶりを想像して楽しんでおります。
[妻の名前]のその後の経過はいかがでしょうか。充分に気をつけるよう、あらためてお申し伝えおねがいいたします。
さいわいに元気でおりますから、ご心配のないように、またからだに無理されぬよう、くれぐれもおねがいいたします。
●●の除隊も近々、近づいてきました。三年というと長いようですが、すんでしまえば早いものです。ちょうど、この便りが着くころには、都合が良ければ帰還しているかも知れぬと思っております。よろしくお伝えください。
いずれの方面にも同様お便りは出していませんし、今日も失礼してますから、[次男の名前]、●●、●●、川並などへおついでによろしくお伝えねがいます。また店の方へも無事なる旨、一筆おたよりくださるようお願いいたします。
いずれ近いあいだに、おのおの出すつもりでおります。
なお機会があれば、できるだけ[長女の名前]の写真を撮っておいていただきたいと思います。
いずれまたおたよりいたしますが、取り急ぎ健在ご通知まで。

敬具

呉局気付セ参弐セ四〇吉村隊

ご両親様　　Ｓ　拝

あて名は右の通りの字を使用してください

Ｓさん関係資料　手紙

二度目の出征で・・・

中川正雄さん（長浜市曽根町出身）

◇大正３年(1914 年)生まれ
◇父順蔵さん、後妻に入ったことさんと、ことさんの娘で異母妹の貞[てい]さんの四人家族。
　正雄さんと母娘はたいへん仲が良かった。
◇昭和９年 12 月、現役で入営し、満洲に派遣。
　12 年２月に除隊。
◇日中戦争勃発により、12 年９月に召集。23 日に中国へ　むけて敦賀港を出港。
◇翌月 13 日、上海近郊の宝山県で戦死。
開魯(内モンゴル)からの手紙と満洲から母へあてた手紙は、最初の出征のときのもの。
2 度目の出征では敦賀から呉淞(現在の上海市)へ向けて出港され、ほとんどその直後(3 週間後)に上海近郊で亡くなっておられます。多数の戦死者がでたという上海上陸作戦に関わっておられたかもしれません。

手紙：中国の中川正雄さんより 家族あて　（昭和十～十一年）

その後みなみなさま おかわりありませんか、おたずね申し上げます。
くだって小生ことも至極元気にて討伐軍に参加いたし、面白い追撃戦や治安維持にはげんでおりますゆえ、ご安心して下さい。ちょうど、今日は中隊を出発してより五日目にて、交戦は約七十名の追撃戦闘だけですが、まだあと六十日あまりもあることなれば、まだまだ戦闘は五、六回は予想いたしております。僕は今、開魯のホテルに宿泊いたしております。満●前ですから　　(欠失)
おん身大切大切です。どうぞみなさまのおからだを大切に。

九月二十九日

開魯にて

正雄

手紙：満洲の中川正雄さんより 母 ことさんあて

（年月日不明）

母上様へ

お母様　朝夕は身を切るような寒さになりましたね。

お母様にはお達者ですか。どうぞ無理をせずにいてください。

正雄もあいかわらず元気でピンピンしていますから安心して下さい。正雄も討伐がこの月中にて、来月早々より帰営準備にて、十二月中旬昴々溪へ帰る予定です。いろいろと考えればそのうちにお正月も来る。除隊の日もあと九十四日もあるとはいえど、目前にあるようです。

先日手紙を出しましたが、土産物は注文いたしましたゆえ、お金は昴々溪へ帰ればすぐに送金いたしますゆえ、よろしくお願いします。

どうぞ母上様、向寒のおりがら、おからだを大切にして下さい。

政雄

ハガキ：敦賀の中川正雄さんより 家族あて　（昭和十二年）

過日はご多忙中面会においでくだされありがたくあつくお礼申し上げます。

ついては、出発の件、確定されざるも、あるところよりの風評によれば、二十三日は午前九時三十分敦賀発とのことなれば、もし確定し変更時間のさいには、電文をもってお知らせ申します。

まずはちょっとご報知まで。　草々

ハガキ：移動船の中川正雄さんより 家族あて

（昭和十二年十月三日）

海また海、青々としてつづいた海も、あと数時間にして呉淞に上陸せんとしている。元気一パイにて来るべき戦闘に待ちこがれている。午前六時（二十八日）呉淞砲台近くに上陸して、西北に向け明朝出発す。出征第一回の戦闘は、この書面がつくまでにすることでしょう。とにかく、倉本部隊敵前上陸の地なれば、人家は全部破壊されており実にさびしいものです。

ではみなみなさま、おからだを大切に。

ハガキ：中国の中川正雄さんより 両親あて　（昭和十二年）

拝啓　時下秋冷の候、ずいぶんと久しきのあいだ、ご無沙汰にくらしおり、みなみなさまおかわりありませんか、つつしみておたずね申し上げます。くだって小生こと、ご両親様の一心からなる武運長久をお祈り下さる神仏の加護によりて、元気旺盛、第一線に活躍いたしておりますゆえ、他事ながらご休心を下さい。親類のみなさまや近所のみなさまにくれぐれもよろしくご伝言をください。今までに一度たよりをと思いながらも、第一線のこととて戦備におわれ、疎遠のだん悪しからず。故郷のみなさま、おからだを大切に。移動にて返信無用。陣中第一線にて。

中川正雄さん関係資料　奉公袋、手紙、ハガキ、軍隊手帳

「やんちゃが強くても、勉強が弱くてはなんにもならんよ」

植田 潔さん（甲賀市信楽町出身）

◇大正 11 年(1922 年)生まれ。6 人兄弟姉妹の 2 番目。

◇高等小学校卒業後、農業のかたわら青年学校で学ぶ。

◇昭和 18 年 1 月、敦賀へ現役で入営。饗庭野演習場で訓練中に、フィルピン･ネグロス島へゆくと家族に手紙で連絡。

◇昭和 19 年 11 月 6 日、フィリピン･レイテ島のタガミ西方で戦死。

兄の安正さんによると、潔さんはすっぱりとした、なんでも進んでやる性格で、友だちが多い人でした。

手紙に出てくる「比島」はフィリピンのこと、「青年学校」は農業についた人が通った公立学校で軍事教練もさかんに行われました。「第一線」は戦闘が行われている場所のことです。

手紙：フィリピンの植田潔さんより 父 安治郎さんあて

（昭和十八年十一月十一日）

拝啓　時下晩秋の候、その後久しくご無沙汰いたしておりましたが、家の方よりたびたび懐しいおたよりいただき、嬉々と拝見しては、郷里の様子を思い出しております。家の方のみなみなさまも、何のおかわりなく有健にておくらしくださるよし、何より結構と存じます。くだって自分こと、至極元気で日夜軍務にはげみおりますゆえ、他事ながらご安心ください。

暑い夏も内地はすっかりかわって、今は朝夕すずしい晩秋とあいなり、また、秋稲刈に多忙なることでしょう。一昨年を深く郷想いたします
盆踊もおもしろく終って、また祭・運動会・青年学校の査閲も終りましたか。
今日、耕太郎君・吉治君より、近親者様より多くおたよりいただきました。なかでも辻本清治君の慰問文は分団を代表して書面を入れてくれた。この手紙を見て、野戦へ着いて、内地のことがいっそう深くしみてくる。
安和君も一生懸命勉強して、また立派な軍人となってくれたまえね。やんちゃが強くて勉強が弱くては、なんにもならんよ。薫君も大分大きく成長しておもしろいことでしょう。
当地はいまだ厳暑。早く内地のような気候にはなりません。
全身がすっかり真黒になって、炎天下で元気のよい顔を内地の家の人々に見せたいのですが、当地は写真屋がなく、写して送ることは、今でもできず残念だが、なにぶん第一線で写真なんぞ写しているひまが〔ない〕、討伐勤務で多忙だ。
今日は別に紙を一紙同封しているゆえ、お受け取りください。それは自分が入営して作った貯金通帳番号と、（●号）です。もし、自分が失なったとき、家の方へこの紙を保存しておいてくだされば すぐ分かります。ですから、この紙は大切に保存しておいてください。
いろいろ書きたいことはありますが、なにぶん忙しくて今日はこれにて失礼します。
近親者様へもよろしく。では取り入れにおはげみ下さい。
　　比島より　　植田一等兵
　父上様
　十月十一日出

ハガキ：フィリピンの植田潔さんより 父 安治郎さんあて
（昭和十八年秋）

拝啓　先日ご親切なお便り、たびたびありがとう。うれしく拝見いたしました。その後、ご家内一同様もおかわりなくご勇健で、増産に邁進いたしおられるよし、なにより喜んでおります。
また、おいおいと秋の取入れに多忙なることでしょう。ご苦労さまですね。内地の気候は秋で、いろいろ柿、栗、松茸など、秋は楽しいですね。今年はこうしたものは豊作ですかね。自分も昨年の秋を思います。八月九月十月は夢のように早い。盆踊なんか、わすれておった。運動会も、村の行事も。自分には月日もわからないくらいで、たよりで知ったよ。青年学校の査閲終ったでしょう。昇平君および今年の壮丁者の入隊日をお知らせ下さい。
また、自分の部隊へくる人もあるでしょう。山本幸一さんは帰っておられましょう。おたよりこまったが、なにぶん帰られたようすです。幸一さんにいろいろ比島のようすを聞いてください。良くわかります。
辻本三男様より新聞をたびたびお送りくださいます。
では、近親様へもよろしくね。では衣類はあとの便にて、失礼。
　　さよなら

「みなよい物を買って来て上げるよ。いつのことか楽しみに待っていて下さい」

安田新市さん（近江八幡市［旧安土町］出身）

◇明治43年（1910年）　生まれ
◇昭和12年9月に召集を受け、中国へ出征。約1年半で除隊、帰郷された。
◇昭和19年1月、補充兵として35歳でふたたび応召。長男の吉右衛門さんは16歳。手紙によるとその下に4人の妹がいた。
◇2月6日に門司港から出発したが、その2日あとに撃沈され、亡くなった。

新市さんは両親、妻、5人の子供とくらしておられ、門司から家族にあてた手紙では、一人ひとりに言葉をかけています。戦死公報が到着した数日後に末妹が生まれました。
手紙にほのめかされている行き先は台湾でした。軍事郵便に場所や日時を書くことは、禁じられていたからです。

手紙：安田新市さんより 家族あて　（昭和十九年二月六日）

拝啓　時下、その後かわりございませんか。私はおかげをもって至極元気に軍務いたしておりますから、安心してください。入隊後、たよりをと思っておりましたが、その機会を与えられず、さいわい本日表記のお宅へご厄介になり、ペンを取った次第です。氏の家を、明日出るとも、いつ出るともわかりませんから、返事は出さないでください。行く先は惣太さんのお父さんの名前と私のエトです。しかしスパイの関係上、誰にもいわないでください。海はいま、敵の魚雷などにて非常に危険です。自分はもとより、神様仏様におすがり申します。
家においても十分な信仰をたのむ。御所内へよろしくたのむ。私一人のためでなく、真に国家のためなんですから。
今回、兄様にたいへんご厄介になって、たいへん喜んで軍務に精励できることをよろしくお伝えください。宿賃も兄様が払

ってくれました。いずれ、部隊がわかればおたより出すから、わからないことがあればその時に返事をください。
父上も年寄のことゆえ、決して無理なことはしないよう気長くやってください。私が帰るまで、なにぶんよろしくたのみます。母上も年寄のことなれば、身体に気をつけて病気をせぬよう子どもの世話をおねがい申します。
吉右衛門〔長男〕、お前はもはや相当な年ごろであるから、よく時局を認識して、今までよりいっそうよく勉強して、来るべき高工の入学の栄を取るよう身体に気をつけて、立派な日本人になり、お国のために働け。おふじ〔妻〕、お前の責任はたいへん重くなったが、今より無理をして倒れないよう、子どものことはなにぶんたのむ。
ひろ子〔長女〕は姉ということをいつも頭において、なにごとにも模範を示し妹を可愛がってやってくれ。父がいないのだからよりいっそう勉強して強い日本人になってくれ。きぬ子〔次女〕はあまり身体が丈夫でないからよく運動して身体を丈夫にし、ともに勉強もきばりなさい。
満子〔三女〕は今年学校へ行くのだから、先生の教えをよく守り、兄姉さんのいうことをよくきいて、元気に登校しなさい。お父さんはお前たちの成績をたのしみに待っているよ。節子〔四女〕はみな学校へ行くのでさびしそうだネ。あまり無理をいって、みなをこまらせないようにしなさい。しかし可愛らしくなった。●から●●お父さんが帰った時には、みなそれぞれよい物を買って来て上げるよ。いつのことか楽しみに待ってください。
御所内の父母様をはじめ、みなみなさまに、時局がら十分身体に気をつけて病気にならないようにお伝えください。ふさ子やふみ子のかおが、目にちらつきます。●●様やみなさまによろしく、お元気で。また軽便にて。

さようなら

新市

父上様へ

植田　潔さん・安田新市さん関係資料　ハガキ、手紙、万年筆

「毎日、観測所へあがって敵陣を砲撃しております」

Mさん（東近江市[旧八日市市]出身）

◇明治44年(1911年)　生まれ
◇現役で入営（昭和6年か）。幹部候補生に志願して合格。
　除隊後の昭和9年、T子さんと結婚。
◇昭和13年5月に召集を受け、少尉として応召。
　両親とT子さんと2歳の長女、そしてT子さんのお腹に
　3ヶ月の長男がいた。
◇満期除隊するはずのところ、戦死した上官にかわって
　大隊長に着任し、除隊延期。
◇昭和19年6月、衡陽近くで戦死。

最初の入営で将校の資格をえたMさん。日中戦争がはじまると、軍人としての責任感から、T子さんの気持ちをよそに召集を心待ちしていました。手紙でも、場所や月日を伏せて戦地の様子を知らせています。それでも、無事の報告と、ご家族への感謝と心づかいは忘れておられません。

手紙：出兵前のMさんより 父あて　　（昭和十三年六月）

拝啓　いよいよ十五日饗庭野出発。和邇、大津、八幡、守口をへて、大阪の着にて、〔ここから〕乗船することになりました。たぶん大津へは十六日の夕方着で一泊の予定です。大阪へは十九日夕方着です。このことは秘密であるからいえませんが、藤重様へよろしくお伝え下さい。いよいよ第一線にて活躍することになりましたが、しっかりやってくるつもりです。私の不在中、妻子が面倒をかけることと存じますが、なにとぞよろしく。なおご両親様のご健在を祈り上げます。
先は右お通知まで。　　草々

M

［父の名前］様

手紙：中国のMさんより 父あて　　（？年八月二十八日）

拝啓　残暑きびしきおりがら、ご家内様ご壮健にて農事のおん事と存じます。
くだって小生その後　健全にて軍務に勉励いたしておりますので、ご安心ください。
なお、次に小包お送り下さる節、空気枕、石鹸入れ、ヨージ入れなどおねがいします。本年は冬物は、昨年たくさん送っていただいたのがありますから、いりません。また、その節おかずになるめずらしい缶づめおねがいします。
　ご家内様　なにとぞおん身大切のほど、祈りあげます。

草々

八月二十八日

M拝

［父の名前］様

手紙：中国のMさんより 父あて　　（年月日不明）

拝啓　久しくご無沙汰いたしました。おゆるしください。

その後、健全にて軍務に精励しておりますから、ご安心ください。さる七月二十八日より約十日間、討伐に〇〇方面へ出動、無事帰還いたしました。実に道路は悪路にて苦心しました。歩兵が第一線に進めば、砲兵は工兵に道を修理してもらって前進する。騎兵は偵察するといって、まことに討伐が早く進みました。しかし犠牲者も相当出て、わが森田隊よりも一名戦傷死者が出ました。自分も、無事帰りえたことは、ご先祖のご加護とご両親様はじめ、ご家内ご一同のお祈りのたまものと、堅く信じます。おばあ様のご年忌も九月二日と存じます。とくに兄弟が無事に戦地で働けるのもご先祖のご加護と存じます。小生こづかいは戦地には不用につき、おりがあれば五十円ほど送金しますから、丁重におばあ様の年忌をして上げてください。おねがいします。なお、●●君ご病気のよし、せっかくご養生のうえ、われわれ男兄弟すべて支那大陸にて雄飛しようじゃありませんか。

充分お大事に。小生また近く出動の予定です。ご家内様のご健康を祈る。

草々

M

［父の名前］

手紙：中国のMさんより 父あて　　（年不明）

拝啓　初春の候とあいなりました。ご家内様その後ますますご壮健のよし、喜びしております。くだって小生、健全にて、警備の大任に服しておりますから、ご安心ください。小生、先月〇〇日まで、小生の小隊は、小生指揮して〇〇に警備しておりますが、その後〇〇へ移動して、目下長谷川少尉殿と二人一緒に、毎日の観測所へあがって敵陣を砲撃しております。平木の鈴木様は、前の警備地の時は別におりましたが、今度は同じ所で勤務しております。しかし、中隊長殿のおられる所より約一里半ほど離れた所です。全員元気で皇国の使命達成のため、奮闘すべく邁進する覚悟をもっており、われわれ小隊長としてもたのもしいかぎりです。目下警備しているところは山間にて、二、三軒ある支那家屋に入って警備しており、毎日雨が降りつづいて、道はとてもひどく、水田を歩いているようなものです。芙●はもう大分咲いてます。毎日毎晩警戒に立つものは小高い山の上にワラの小屋をこしらえて立つのです。ご安心ください。

［息子の名前］も日ましに成育しているよし、喜んでおります。

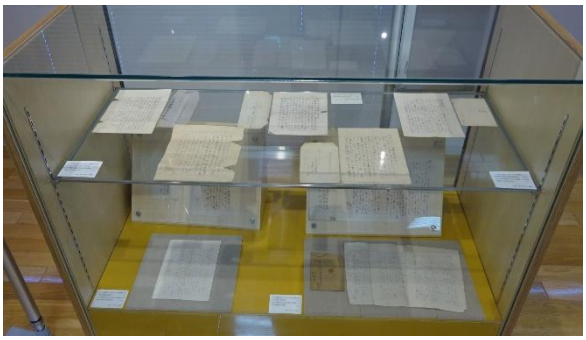
［娘の名前］もだいぶん歌が上手になったそうですね。この間いただいた写真を見てびっくり。その大きくなりぶり、ご両親様のお骨折、あつくお礼申しあげます。姉妹もその後元気のよし、喜んでおります。

「●●」も年ごろにて、われわれ兄弟はあと何人かたづけねばならないのですか？　よい縁談口でもあれば嫁入りさせた方がよいと思いますが、小生出征中。ご両親様お元気ですか。小生出征のことはかまわず、お取り計らいください。小生戦地にあるとはいえ、妹らの縁談については常に心にかけておるのです。ご両親様仕事に無理のないようおねがいします。

お父母様おん身大切のほど、祈ります。　　草々

三月八日　　M拝

［父の名前］様



下段：Mさん関係資料　手紙、ハガキ

上段：Uさん関係資料　手紙

「一年もご奉公したのだし、ゆっくり養生して無理せんと・・・」

Uさん（東近江市［旧八日市市］出身）

◇大正3年(1914年)生まれ

◇八幡商業学校卒業後、朝鮮の大田で叔父が経営する商店に勤務。

◇昭和9年12月、現役で入営し、満洲に駐在。幹部候補生となって、翌年11月除隊。商店に復職。

◇日中戦争が勃発により12年7月に召集を受け、山西省へ出陣。2度の負傷をへて、13年除隊、復職。

◇18年ふたたび応召、朝鮮駐在の部隊へ入隊したが、ニューギニアへ転戦し、19年10月パプア島で戦死。

最初の任地の満洲、2度目の中国からはたくさんの手紙を家族

へ書き送っています。とくに 2 回目の出征先の山西省では、日々の戦闘の様子をくわしく書いておられます。2 度目の負傷のあと除隊されましたが、最後に出征されたニューギニアからは、手紙が一通も届きませんでした。

手紙：満洲のUさんより 父あて　（昭和十年？十一月四日）

一回目の出征地 満洲の様子

拝啓　その後は本当にご無沙汰に過ぎてしまい、失礼申しあげました。

なにしろ戦地勤務の事故処理、陣営の衛兵、停車場の衛兵、市内巡察などなど、あるいは馬舎を作り、臨時風呂を作るなどなどで、音沙汰なしのだん、ご容赦。

車中よりご通知申しあげましたとおり、十六日午前三時五十分竜山出発。鴨緑江を渡り、列車前後には軽機をすえ、衛兵が立つ鶏冠山、奉天もへて、名高き錦州（今は錦県と改名）で、十七日夕暮れがせまったコーリャン畑は広漠千里の野に繁茂し、高さ五、六尺もある。列車はただ西南へ西南へ、満支国境の山海関にて午前五時半。万里の長城は、列車の燈火管制で幕をおろしていたので見えず。今十七日午前十時。われらの下車駅「唐山」着。人口十三万で、日本人は約四百名という。鉄筋コンクリートの大きな駅で、駅前は多数の日本人が、お茶、弁当の接待をしてくれる。北支に入ると、文明が満洲より進んでいて、町も美しい。沿道には土民がぼやぼやと列車を見ておるが、なにしろ日に十何列車がとおるよし。出迎え人もご苦労さま。当町は一番の抗日侮日の本拠という。そのまた元という。

航空大●がわが連隊の宿舎である。周囲二里もある大土塀でかこまれた庭園には草花、噴水の施設もあり、十中隊は煉瓦建の三階である。

北満の満人家屋とことなり、電燈および呼鈴の設備がある。機械があれば扇風機もまわる。室内のスチームにもアメリカ製の英語が入っている。十二貫もある背嚢をおろし、装備を掛ける準備をす。建物が上等なので、ごんごん傷つけるのはもったいない気がした。

毎日飯ごう炊さんなり。大きなアカシヤの木が三階の窓をおおっている。当地には保安隊、護路軍など兵隊がいるものの、二十師団が入りこんでたいへん恐れている。兵隊にも最敬礼をしてくれる。一番困るのは暑いのと良水がないことで、全部煮沸して使用す。

近日、第二行動に移る予定。土塀を登る練習、コーリャン畑中の演習。小生の分隊召集兵にも三十歳以上が三人おりますが、軍服を着れば現役とかわりません。少し支那語が解るので便利す。

諸準備を終えた昨今、ちょっと暇になり、分隊も室内では肌丸出しにして寝転んでいる。背広をぬいで出た小生も、軍服に替えれば非常に若がえり、たいへん面白い。

ご両親様をはじめみなさま、くれぐれもおからだを大切に。

●●商店の主人も、二十日より暑中休暇にご帰国中ですが、小生は出征中なので〔会社の夏休暇は〕お流れかもしれません。もしお帰国されたら、ほどほどお世話になっておりましたので、よろしくお礼をいっておいてください。

店では明治生命二十円、簡易保険三〇四円でございます。

もし帰国ならなくとも、一度お礼状をお出してしてください。

身体を十分大切にして、ご奉公するつもりです。なにとぞご安心ください。

では失礼、陣中乱筆のほど、お許し。

北支南雲歩兵部隊　第十中隊

U

店より送る写真は出征●預祭の帰り

手紙：山西省のUさんより 両親あて

（昭和十二年八月三十日）

二回目の出征地 山西省の激闘〔原文はそうろう文〕

拝啓　その後ご無沙汰いたしました。

二十二日夜、同地出発、連隊と同行動をとるべく約三里の夜行軍を実施。夜十一ごろ、目的地の陀里村に到着しました。

途中、ビュンビュンと飛弾が頭上をかすめ、砲弾の爆破音響が一里先に聞えます。村には馬や休憩兵が残り、われらも休憩しました。約一時間うとうとしている時、銃声にわかに盛んとなり、全員起きて、小生の分隊も山上警備につきました。二十三日午前二時、再び下山して中隊全員、大隊の位置に集結。小休止のあと、急いで背嚢を外して軽装になる。夜明までに山麓まで駆け急がないと見つけられて射たれる、とのことと、急ぎ低地の方で、向こうが山から見へぬ所をぬいながら行進しました。なにぶん昨日の夕五時より食事せず歩きづめであり、空腹で戦闘して負けては、または、飯を食はず死んでは馬鹿らしいと、一地に休けいして、朝食といたしました。

その時、昨夜襲撃して一度占領した長尾中隊長は二分後に逆襲を受け、中隊長以下全滅したと、頭の傷をおさえ、着のみ着のまま逃げ出して来た某一等兵の話。里山のごとき敵といいます。それから、わが中隊攻撃の山より一段低き山で聞いた者は、一同熱血わき、決死をちかいました。朝食後、前進しようとした時、大隊より伝令が来て、十中隊は一本松の線まで退却

せよ、兵力不足にて、他部隊到着後、攻撃するとのこと。「焼石に水」というわけで、退き壕を掘り、一休みのうえ、午後決死斥候にて上等兵三名が選ばれ、中腹まで行き、火点の偵察に向いました。雨が降り出してからだはびしょ濡れになり、夜非常に寒い思いをしました。

二十四日、わが十中隊の一個小隊到着。戦闘準備をそなえ、いよいよ明朝払暁、攻撃と決定。分隊長を集め、いろいろと注意もあり、早く休めとのことですが、いっこうに眠れず。

二十五日、午前一時起床。二時より行動開始して、音のせぬように午前四時山麓の川に着く。朝食して待機。午前五時明くなって、飛行機六台飛来し、爆弾投下。砲兵の射撃四、五十分続き、歩兵も山に登ります。はじめのカブト山は難なく登ったとき、左の高地五〇〇より急に猛射撃を受け、わが軍も軽機、重機、擲弾筒を並べて射撃開始し。あまり猛射は銃身が焼け、小生のタオルに水を吸わせて冷却したほど。そのうえ敵の移動を見て、十中隊の二小隊が右よりまわり、三、一小隊は射撃をいたしました。　〔中略〕

一戦終って、分隊をまとめたところ、参加人名一〇六名中、死一、負傷二にて、非常に損害も少ない。死逆襲を受けて●●。一同非常に堅●歩哨を立てて警戒いたしました。

その後、今日に及んでも、一回逆襲がありました。今も当地の●隊中隊にて近くの山を攻撃しています。

この五〇〇米の高地は、敵が一年間かけて築いた山と聞き、師団でも相当心配していたところ。いずれ無事凱旋できれば、その時でもくわしくお話できるでしょう。

　ビール、サイダーの間食は毎日、一同いただき、元気。小生ちょっとの傷もなく、これ神仏のお護りに他ならない。

敬具

U

手紙：山西省のUさんより 父あて（昭和十二年十一月四日）

二回目の出征中、一度目負傷〔原文はそうろう文〕

拝啓　冷気日ましにあい加わりました。

ご両親様をはじめ、みなさまにはおかわりもありませんか、おうかがい申しあげます。

さて、小生、先日井陸の山上よりご通知申しあげました。その翌日には新高山の強行登山にて、中隊長も戦死されました。

その後、山から山へ、山鼠を追うように支那兵を追撃いたしましたところ、さる十月二十九日払暁に敵の夜襲を受け、これを撃退して、午前中待機いたしましたところ、正午より再び追撃の命令がくだり、小生の分隊、第一線にて中隊正面の左方に展開。山攻撃のため、いったん谷間におりようと段々畑（一段の高さ約五、六尺）を前進。小生、先行しようとした時、敵の小銃のため一撃を受け、戦友のそばまで来て倒れました。

仮包帯をして大隊本部軍医が診断したところ、鼻部擦過、右頬骨部貫通とわかり、安心いたしました。

その日は患者収容所にて夜を明かし、明くる三十日、衛生隊とともに山をおり、龍荘村の野戦病院に送られ、介抱を受けました。血も止まり、傷も一つもうずかず、包帯がかえって邪魔になるありさまです。軍医も十日あまりで治るとおしゃってますので、なにとぞご安心ください。ほかの傷とことなり、第一線でしかも攻撃前進中の一等傷ですから、不幸中のさいわいと喜んでおります。

本十一月四日、いまは山西省太原の東方三十里の平定県城内の第一野戦病院にくらしております。病院の団子やおかずを作り、普段と何らかわりもありません。軽傷患者ばかりで、うめく者もなく、至極安眠もできます。

師団に病院が四つあり、当第一野病にも入院患者六〇〇名といいます。いままでの二十四に近い戦闘の状況、いちいちお知らせしたいところですが、時間もなく、いずれ詳しく。

では、みなさまにもよろしく。

　十一月四日　　U

手紙：山西省のUさんより 両親あて（昭和十三年五月十九日）

二回目の出征、二度目負傷前の激闘〔原文はそうろう文〕

拝啓　花咲き、鳥うたう春はおとずれました。

ご両親様をはじめみなさまには、その後いかがにおくらしあそばされていますか、お伺いいたします。くだって小生、二月初旬、住地〇〇を出発、一〇〇里の行軍のあと、〇〇攻撃に参加いたしました。途中でも気がかりながら、手紙を出す機会がなく、本日までのご無沙汰、なにとぞ悪しからずご寛容いただきたいです。

新聞紙上にてご承知のこととは存じますが、出発以来、山西の平野に山岳に激戦を重ね、戦死傷者もまた多数にのぼりましたが、小生は不思議にもかすり傷すらなく、ますます元気旺盛に奮戦いたしております。

三月〇〇日には、汾河を渡り、退却しようとする数千の敵。月おちて真っ暗になった河岸に待ち受けた小生らは、半分くらい渡り終った者、渡河中の者、このとき猛然と戦闘がはじまり、捕虜四〇、軽機関銃四、小銃六〇、その他電話機、弾薬、など多数うばいとりました。夜が明けて、師団参謀や大隊司令官たちの他、幹部たちが見に来られ、小人数にてよく一〇〇倍

の敵を撃滅したものだと歓喜いたしておられました。小隊長殿からも今日の戦闘は殊勝の功だと誉められ、一同鼻高々に喜んでおります。
その後も不眠不休で十日間、四十五里の山地を駆めぐり、ようやく平地におりて来ました。ただいまは〇〇駅より〇〇駅間、鉄道警備についております。一同意気いよいよ旺盛にですので、はばかりながらご心配なく。
桜はなくても桃の花は今をさかりと咲き、麦も四寸くらいにのびております。大地に春は来たけれど、民家はことごとく荒され、食物もなく深い隠れ穴生活の彼ら支那住民の春はいつ来るのやらー。この現状を見て、小生ら日本国民は、まことに涙の出るほど幸福でございます。
ご両親様、みなみなさまのますますご幸運を祈り、筆を止めさせていただきます。まだご通知したいこと、たくさんございます。以下順々にご通知申しあげます。
なお、申し遅れましたが、戦闘前の行軍中の宿舎で、●●君がいるを知り、面会に行きました。たいへん元気でした。
　　ご両親様

手紙：満洲の病院のUさんより 両親あて

（昭和十三年七月二十日）

二回目の出征

ご両親様
たいへんお暑くなりましたが、遼陽でも毎日八十五、六度の炎熱が続いております。ご両親様にはお変わりもございませんか、お伺い申し上げます。くだって僕も次第に快方に向い、このごろでは至極元気にて近く退院もできるくらいになりました。なにとぞご安心下さい。
近江にも毎日雨続きで、田が海のようになっていると聞きましたが、被害はございませんか。神戸では多数の死傷者が出たと新聞にありまして、実に驚きました。この世の災難はどこでおこるか、見当もつきませんね。
さて、今日は七月十五日です。想い起せば昨年七月十二日、軍装検査と聖旨伝達式が行われ、今晩は靴も巻脚絆もはいたままで横になり、夜十二時起床、星のきらめく営庭にしゅく然と整列、最後の乾杯を終えて、進軍ラッパも勇しく駅に向う。
営門より停車場まで約三十町。午前二時の早さにも一杯に見送人が詰め、万才、万才、万才、万才、と旗の波に送られ、十六日の午前三時五十分、破れるがごとき歓呼の声に送られ、勇躍支那膺懲の途についたのでございます。
かくて、十八日、北支唐山着、その後は各地に転戦、戦場の拡大につれて、本動員がくだり、皇軍の意気ますます盛んにして、刻々戦果をおさめ、悪戦苦闘、いく度となく死線を突破、本当に思う存分戦争をしました。
今日、本院にて同じ十中隊の小隊長が二名まで入院しておりました。一人は昨年七月末の戦闘をした人ですが、耳に砲弾破片を受け、顔面の神経をいためたために顔が変形して見苦しくなり、なお一人は先の秋本小隊長戦死後（僕も負傷後）来支され、戦闘参加四日目に敵の刺撃にて左肺を貫通。息もれがして大きい声が出せぬと申しおられ、本当にお気の毒に思いました。
僕の連れていた分隊も、今は四名くらいだとのこと。実に驚かされ、中隊兵力も約 1/3 になっているとのことです。わが軍の手落ちに乗じ、敵の逆襲にてやられたらしく、残念至極です。今は仇討にうんと多数の兵が行ったそうです。今日も面会の時、小隊長が僕に、「君も、すでに一年もご奉公したのだし、手がらも十分たてているのだから、もうゆっくり養生して無理せん方がよいで」と申され、あまり無理する必要もなく、十分治して行きたいと思っております。昨年の傷とちがい、今度は傷口も多く、盲管のため、意外に手間どりましたが、仕方がありません。悪しからず。
なお、各団体からいろんなお世話になっておられるようでしたら、入院しているこのさい、うんと礼状を出したいと思いますから、せいぜい詳しくご通知下さい。お願い申します。
たいへん長い乱筆にて失礼しました。くれぐれもおん身お大切にして下さい。遠い遼陽の空よりご健康とご幸福をお祈りします。
　　七月十五日　　敬具
　　U

「誰よりも一番泣いてください。
そして早くあきらめて下さい」
高橋克己さん（彦根市出身）

◇大正５年(1916 年)生まれ。兄２人がいて、きく子さんと克己さんは双子。
◇両親は健在だったが、父は克己さんの出征中に死去。
◇昭和 12 年、現役で入営し、満洲の関東軍に配属。
◇14 年のノモンハン事件で戦死。
◇長兄(昌夫さん)は中国戦より復員後、戦病死。次兄(樟　太郎さん)はアドミラルティ島で戦死。
克己さんはお父さんが亡くなったとき、そしてハイラル(ノモンハン近くの街)へ行くときと、戦場から手紙を書き送ってお

られます。
戦場からは死を覚悟した遺言をされています。涙もろいお母さんに対して、「誰よりも泣いて下さい。そして忘れて下さい」と書いておられました。

手紙：ノモンハンの高橋克己さんより 妹 きく子さんあて

（年月日不明）

拝啓
春の遅い満洲にも、ようやく春が訪れました。
春来れど、最愛の父を失いし自分は、晩秋のような寂寞をおぼえる。花は年々同じなれど、人は年々同じからず。こんな詩があったね。
本日樟兄より、父上の昨年発病以来の状態、また死後四十九日まで、くわしく書いてある手紙をいただきました。
まず第一に感じましたのは、母上様はじめ樟兄や君のご孝養いたらざるところのないご活動に、ありがたくうれしく、ただただ感謝の涙を流しました。父上様もあなたのご孝養にさぞ満足して喜んで参られたことでしょう。
それにつけても、自分も不孝が悔まれてなりません。父上様のご遺言にも母上様やあなたのことを心配し、特にきく子をたのむとわれわれに申されしよし。三人の兄の力で必ず幸福に導きます。これが自分として父に対する孝行の一端でもあります。なにとぞ、あなたもお体大切にして、人に笑われるようなことはせぬよう、いっそう身をつつしんでその日の来るのをお待ちください。
母上様にも父上を失わはれし悲しみとか、またおからだの病などもあり、日ごろ病弱ゆえよろしくお願い申あげます。
私はおかげさまにて至極健康にめぐまれております。ご安心ください。
中隊は今ある事情のため大多忙にて、昼夜わかたず大奮闘いたしております。いずれ中隊全員より、わずかですが出し合って弔慰金を送られましょう。
ていねいに黒字で、中隊幹部および兵あてと中隊長殿あて二通礼状を出すよう願います。

克己

十五日

きく子殿

手紙：ノモンハンの高橋克己さんより 兄あて

（昭和十四年八月二十日）

拝啓前略
兄さん、その後、ご無沙汰いたしました。自分はおかげさまで健康にめぐまれ、ますます元気に活躍いたしております。
私はいま最前線、敵も指呼のあいだに見て、彼に攻撃いたしております。砲声は天地にとどろきわたり、砲弾は四周に破裂し、凄惨なものです。弾痕は蜂の巣のようです。まったく「山形改る」の詞です。今度はどうせ生きてはかえれません。まったく私も覚悟を決めました。死して父のふところにかえるのも、また楽しいです。
兄上たちはなにとぞ仲よくいつまでもおくらしのほど祈りあげます。
母上様、きく子のこと、よろしくお願い申しあげます。今日も砂漠の彼方に日が落ちます。故郷のことをしのび、たおれし友の身を思う。明日の日を想えば、また感慨ひとしおです。
昌夫兄上には一日も早く身をかためられ、ご幸福なご生活になられるようねがいあげます。
樟太郎兄上にはお商売もさいわい成績が良いということ、ますます発展を祈りあげます。
ご両親様のご健康、ご多幸祈りあげます。
気にかかるはきく子のことのみにて、一日も早く結婚生活に入れてやりたく、思われてなりません。おたのみ申し上げます。

八月二十日

兄上様お二人　　克己

※「山形改る」・・・乃木希典の漢詩「爾霊山」の一節
八月二十日はソ連軍総攻撃の開始日。

手紙：ノモンハンの高橋克己さんより 家族あて

（昭和十四年七月三十一日）

拝啓
暑気はなはだしくなりました。おかわりありませんか、お伺い申しあげます。私は以来至極健康にめぐまれ、元気に軍務に精励いたしおります。
さて、突然でお驚きのことと存じますが、私は今回ハイラルにまいります。以後の行動は予測できませんが、軍人として第一線で活躍のできますことは満足です。
母上様には、昌兄上も凱旋なされましたし、樟兄上も壮健にて商売も順調にうまくいっておりますゆえ、ご安心の折からまたまたご心配をかけます。これも国のため、なにとぞお許しください。もとより生還を期さぬ今の身としては、ただただ母上様のご長寿をお祈りいたすばかりです。
兄上様にはなにとぞおからだご自愛のうえ、母上様きく子の

ことよろしくお願い申しあげます。特にきく子のことは、くれぐれもお願い申しあげます。
樟兄上様にはいろいろご心配をおかけいたしました。家のこと、また私のこと、重々感謝の極みです。幸い商売の方も順調に栄あるよし、。何よりのことと喜びおります。このうえもなにとぞ繁昌するよう祈ります。
母上様、きく子のことよろしくお願い申しあげます。
きく子殿、母上をたのみます。よき妻となり、よき母となられるを祈りあげます。
乱筆ながらご近所の方には、家の方よりお伝へ願いあげます。
忙しくて手紙も出せません。

七月三十一日

克己

手紙：ノモンハンの高橋克己さんより 母あて

（昭和十四年八月十日）

拝啓
その後ご無沙汰いたしました。僕はおかげさまでますます健康にて元気で活躍いたしております。ご安心下さい。
僕たちは〇〇を出発してすぐに最前線にまわり、指呼のあいだに敵と対しております。戦線は毎日砲弾に明け、砲声に暮れ、ために天日暗しです。「よくまあ撃つ」と思うほど撃ちます。まぢかに落る時はいうにいわれぬ気持ちです。同郷出身の副官、川添、大野木君もたぶん健在のことと思う。広い戦線のこととてその消息さえわかりません。一緒に来た戦友も、はやいない者もおります。一日一日が自分たちの命の長さです。
酒井部隊はなかなか功績ある部隊で、ハルハ河一番乗りで戦車五十いくつかを撃破したのも当部隊です。実に自分たちも当部隊にまわされたのを、名誉といたしております。
今度こそ僕も生ては帰れまい、と思います。万一、そのようなことがあれば、残れし友に滴みま●覚悟も決めました。お母さん、そのような知らせの来た時は、僕は必ず泣いてくだされるなとはいいません。誰よりも一番泣いて下さい。そして一時も早くあきらめてください。しかし体を悪くせぬようお願いたします。
きく子殿、おからだ大切にしてよき妻として、よき母と早くなって下さい。母上様をたのみます。私の通帳をこのあいだ送りました。これは私があなたに差し上げます。満期準備に残しておいたのですが、その必要もありません。
本日たまたま便がありましたので、大急ぎで書きました。
今後このような便があることもないでしょうから、便りもできません。電報の着くまでは安心していて下さい。
なにとぞくれぐれもおからだ大切に、それのみ祈りあげます。
また、弾着が近くなりました。この手紙を書くあいだも、三回頭から砂をかぶりました。封筒の中に少し砂を入れました。砲弾があたればからだは何も残りません。この砂がかたみです。
ただいまのところ、私は借金もなし、貸金もありません。
後三条町の叔母様、京都の叔父様、堀、西垣、芝岡様によろしくとお伝え願いあげます。
なお、うらの澤野様にはたびたびサンデー毎日をいただきました。よろしくとお礼申してください。そして、●●●の川崎様、上山房江様には慰問袋やお手紙等四回いただきました。アルバムの終りにあった子どもの写真は●●厚子です。操という子にうれしい手紙をもらいました。必ずその操という女の子に僕も〇〇で最前線で活躍していると伝えて下さい。

八月十日

母上様

高橋克己さん関係資料　手紙

「小麦の供出も過日しておきました。
充分たずねて間違いなくして下さい」

青木勘四郎さん（愛知郡愛荘町出身）

◇明治41年（1908年）生まれ
◇父親は早くに亡くなっていた。
◇昭和7年に現役入営、上海事変に衛生兵として従事。
◇昭和12年2月、喜代さんと結婚したが、7月に1回目の召集。日中戦争に従事し、15年除隊。
◇16年、2回目の召集。
◇19年3月にいったん解除されたがすぐに召集。翌年7月、フィリピン・ミンダナオ島にて戦死。

展示した手紙は現役入営して上海に渡られたときのもの。軍事郵便では書くことのできない内容が記されている。
ハガキは3～4回目の出征中に送られたもの。農作業になれていない喜代さんに、細かく仕事の指示をされています。

青木勘四郎さん関係資料

手紙：青木勘四郎さんより 家族あて　（昭和七？年二月）

拝啓　前略　その後の行動をお知らせします。

二月十二日午後三時十五分、駆逐艦つづき護衛のもとに本州・九州を左右にながめながら日本になごりを告げ出発。一路上海に向け航行いたしました。二月十四日上海より駆逐艦５隻、護衛に来り。十五日午前六時ごろ、呉淞付近航行中、砲声を聞き日本の飛行機を見、危険によって甲板の上に出ることできず。午後一時ごろ、元気に上海着、危険により上陸せず。波止場にて寝ました。ただし、小生ら三・四分隊三十名は危険をおかして上陸、衛生材料を陸揚げし、歩兵護衛のもとにトラックにて東部日本人小学校に運搬しました。

翌三月十六日、午前四時起床。昨日の三十名は引き続き運搬作業。午後一時作業を終わり、院長以下来校、ただちに小学校に第九師団第四野戦病院を開設。

役割は、発着部。仕事は患者の収容、発送、入院患者名簿記入、兵器、被服、装具の整理、重傷者金銭貴重品扱、死者の処置、患者の多い時は溜場に入れ、救急処置、飲料水を与える。

病院の区分、（本部、庶務、給与、会計経理）発着部、治療部、病室、薬剤部です。さっそく、衛生隊よりの患者十八名引き継ぐ。内一名死亡。午後十二時、寝床。

二伸

上海は水がたいへん悪く、町はよいのですが、支那人の服装も悪く、割合に見苦しいです。気候はたいへん暖かいのですが、風が強く、朝はやはり霜もあります。外出ができないため、見物ができません。品物の値段は、日本商品はたいへん高く、内地の二倍以上します。軍手でも二十銭くらい、ハミガキ粉でも二十銭くらいです。

また、日本通貨と支那通貨との勘定がむつかしく、日本の六銭六七厘くらいが支那通貨の十セントです。日本の一円が支那通貨の一ドル五十セントくらいです。

野戦病院付近は平常くらいで、戦線は三里ほど離れ、敦賀〔連隊〕が現在第一線で、見るも気の毒な戦病者が十名ほど来ました。愛知川町付近の患者はありません。顔、腰、足等の貫通銃創などで血だらけです。

昼は発着部勤務、夜は時々病室の日直、不寝番、夜警などが三日に一日くらいあります。十八日は重傷病室の日直で、二時間より寝られませんでした。また、軍備不完全のため、入浴もなく、兵室もごろ寝です。

発着部人員、軍医二、看護長一、上者二、●者一、補助者四、計十名です。二月十七日は収容準備および収容八名。二月十八日は収容患者四十一名です。いよいよこれよりここにて勤務するのです。

もし、戦線の看護兵、死亡負傷の時は、野戦病院より補充するらしいです。

場所は

上海　平涼路　東部日本人小学校　第九師団第四野戦病院発着部です。

ご一同様ご自愛専一に。小生も元気です。ご安心下さい。

親類。隣等　みなさまへよろしく。

さようなら

青木勘四郎

ご一同様

ハガキ：青木勘四郎さんより 家族あて

（昭和十九年三月二十二日消印）

拝啓　前はいろいろ心配していただき、何かと都合よくやってくだされ、あつくお礼申し上げます。おかげをもって、予定の通り元気〇〇いたし、至極壮健にお勤めいたしておりますゆえ、他事ながらご休心下さい。

われわれお勤めは、みな話しておる通りですから、何もご心配なく。母上も老いたる身ゆえ、充分大切に無理をせず、予定だけを作り、二人ともどもに留守中よろしくお願いいたします。

なお、矢守情三郎様にはよろしくお礼のほどお願いたします。

まずは右書中、お知らせまで　草々

ハガキ：青木勘四郎さんより 家族あて

（昭和十八？年三月二十五日消印）

拝啓　今回小生に関してはいろいろご手配くだされ、あつくお礼申し上げます。

おかげをもって、予定の行動をもって入隊。至極壮健にご奉公

いたしておりますゆえ、他事ながらご休心ください。さて、はなはだご面倒ながら母上、喜代ともに生年月日、至急ご報告ください。われわれのことについてはいつも話しておりますお勤めゆえ、何もご心配なく。不在中、何かともに不自由なれど、よろしくお願いいたします。矢守情三郎氏についてはよろしくお礼のほどお願いいたします。一東木の件については入谷弥惣平様にお願いして、よろしくやってください。都合よく行きましたなれば、北代にまた出ましたなれば買い求め下さい。どうか、くれぐれもおん身お大切に無理をせずお働き下さい。なにとぞ、親類隣りへもよろしくお伝え下さい。

さきは右ご照会かたがたお願いまで。　　草々

ハガキ：青木勘四郎さんより 家族あて

（昭和十九年四月四日消印）

拝啓　さる十一日付お手紙、拝見いたしました。宅みなさまおかわりなきようす、安心いたしました。小生元気です。ご安心下さい。東京の甚之丞君よりも、元気に帰京したとの通報に接し、安心いたしました。新兵衛君の母も気毒なことになりましたね。さて、小生ら、都合により場所を移動することになりましたゆえ、次の通信あるまで手紙を出さないでください。ところがきまれば、また通知いたします。いずれ帰郷することもあるでしょう。新家の徳治郎君も元通りになり、仲良く行けば結構です。沖●も五一郎君とても、急だったよしにて、みな驚かれたことでしょう。供出最後の一俵分は、もう通帳につけてあり、生産精励通帳にはのってない石灰肥料を払う時にそれで払い、甚五郎にのせて貰えばよい。

日に日に多忙になりましょう。切にご自愛のほど。まずは右通知まで

草々

ハガキ：青木勘四郎さんより 家族あて

（昭和十九年七月十六日消印）

拝啓　おたよりまさに拝見いたしました。水不足にてみなさまおこまりのこととお察しいたします。水少なく、不自由ながらみなさまおかわりなくお働きくだされ、なによりと存じます。

さて、小生おかげをもって元気にご奉公を重ねておりますゆえ、他事ながらご休心ください。当方よりの葉書、入れちがいとなりました。おたずねの件、別に何ともなく過日帰郷の二●勘定しておき、入れておきましたゆえ、入用の方お使い下さい。なお、東京の甚之丞君よりは礼状も着き、安心しましたが、滋賀県よりは送ることもどうかと思います。弟も七月末か八月に帰郷するようすですから、その節、訪ねてやってそ●にして下さい。

小麦の供出も過日しておきましたので、充分できることと思います。充分たずねて間違いなくして下さい。

暑さ厳しいみなさま、切に々ご自愛なして下さい。矢守情三郎君もご苦労でしたこととお察しいたしております。まずは右お返事まで。

草々

青木勘四郎さんの写真（3枚）　青木喜代さん提供

青木勘四郎さん関係資料　陸軍軍帽、水筒、日の丸鉢巻

青木勘四郎さん関係資料

青木勘四郎さんから家族への手紙１点

青木勘四郎さんから家族へのハガキ５点

写真３点、、手帳

「あの氏神様の藤の花　薬師堂の桜」

奥島宗男さん（甲賀市[旧甲賀町]出身）

◇大正８年(1919 年)生まれ

◇男４人、女３人の兄弟姉妹の長男。

◇昭和 15 年８月に現役入営し、満洲牡丹江へ出征。

◇昭和 19 年 10 月、フィリピンへ派遣。20 年６月、ネグロス島で山中に退却中、迫撃砲を受け、戦死。

◇次男の一重も、満洲から台湾へ派遣され、フィリピン・レイテ島で戦死されている。

満洲からの手紙には、当地の美しい風景を知らせながら、故郷の行事をなつかしみ、家族一人ひとりに対して気づかいのことばを送っています。

出征前にランドセルを送っていた 15 歳年下の末妹すみ子さんには、思いやりに満ちた絵はがきを送っておられました。

手紙（巻紙）：満洲牡丹江の奥島宗男さんより 家族あて

（昭和？年三月）

拝啓

内地は三月ともなれば草木もそろそろと若芽を吹き出し、畑の麦は天に向かってすくすくとのび、のどかな暖い日が毎日続いていることと思います。その後みな様達者にて、旱害復旧に毎日多忙のこととお察しいたします。宗男もあい変わらず元気です。なにとぞ安心して下さい。

懐かしの郷里、二十二年目に父母の膝下を離れて、歓呼の声に送られ内地を出発してより、早くも月日は矢のごとく、二年半の歳月は夢のごとく過ぎ去りましたが、いつもたびことに思い出されるのは、膝下を離れてはじめて親の恩、両親をもつわが身のありがたさをつくづくと感じさせられます。また先にご送付くだされし父母の写真は胸におさめ、ことあるごとにながめては、自分を励ましてくれる、唯一の父母の心としています。

いつの便りも、お喜びしていただくような便りを差し上げることのできぬのは、慚愧の次第でありますが、上官の親身のご教育とご指導とにより、また神仏のご加護により、このあいだなに一つ間違いなくご奉公をいたしていることのみは、喜んでいただけると思います。いつも部隊長閣下の訓話訓示を拝聴するたびごとに、精神教育を受けることは実に多いのであります。

昨年十二月、閣下の訓話中に、お前たち在隊のあいだ、一つも間違いなく無事ご奉公を終え、このあいだ身体をきたえ、精神をねり、そうして帰還し、郷里において再びお召しを待つ　ー

それはなによりの親に孝であり、また君に対しても忠なり、と。

今後とも間違いをおこさないよう、自重してご奉公をいたす覚悟ですから、なにとぞご安心してくださるようお願いします。

さて、二月一日付け兵精勤章を付与をされましたからお知らせいたします。二月中ごろに撮った写真ができましたから、日中で光線が強くてうまくなかったかもしれぬですが、同封にて二枚送付いたします。ご笑納して下さい。

国防婦人会の方「第一組の寄書と正木ちゑ様」「奥島つぎゑ様（二月）」などよりお便りをいただいていますからよろしく。

郷里の大祭も近日のことと思います。祭りがすぎれば仕事もいっそう忙しくなること、皆様とくにお身大切に。

またお便りすることにして、今日はこれにて筆をおきます。

陸軍記念日の佳節に

於牡丹江

まずは近況かたがた、写真送付まで

宗男拝

ご両親様

手紙：満洲牡丹江の奥島宗男さんより 家族あて

（昭和？年二月二十三日）

拝啓　みなさまご壮健にておくらしのことと思います。宗男もあいかわらず元気にてご奉公いたしておりますから、ご安心下さい。

先日一月十日ご送付くだされた慰問袋、小包、二月二十日受取りましたからご安心ください。ご多忙中にもかかわらず、いろいろの品を取そろえご送付くだされ、異境にあって慰問袋こそ実にうれしいものであります。ありがとう　ー

本日組合の福井さんよりおたよりをいただきました。組合の役員も任期満了にて改選、通常総会のようすなど、また組合長もかわるらしいそうですね。（組合長は現在未定とのこと）

また、儀峨の奥島君（組合の）よりのたよりには奥島●彦君が組合に入るとかのうわさをしているとのこと。しかし、真実は判明せぬとのニュースを知らせて来ました。

満洲にて義勇軍の生徒は、徴兵検査に合格すると入営前に郷里へ帰るらしい話を聞いていますが、弟一重は本年検査ですね。合格したら入営前に帰るようなことを家に知らせてはこないですか。

昨日は岩坂の奥野叔父様よりおたよりをいただきました。同日、学校生徒の作品（家よりあて名を書いて送付）も受け取りました。

先日お知らせの写真、本日は同封にて一人写真（一枚）、二人写真（一枚）、計二枚ご送付いたしますから、受け取り下さい。二枚とも二月十六日東京城にて写したるものです。

一人写真を山上、杉谷、弟たちへも送付す。

末筆ながらみなさま おん身ご自愛のほどお願いいたします。

ではこれにて失礼。

二月二十三日　　東京城にて

奥島宗男拝

家内みなさまへ

手紙：満洲牡丹江の奥島宗男さんより 家族あて

（昭和？年三月十九日）

永らく寒かった満洲も、いつか遠山の雪は解け、日中は内地をしのばせる気候がおとずれて来ています。

内地は畑の麦、菜種などが今、青々としてのび、山野の草木も芽を出し、鳥は歌う。（あの氏神様の森の藤の花、薬師堂の桜）

郷里の自然の美は（時局の進展も知ってか知らずか）年々同じく春を迎え、郷里にいたときのままの姿をくり返している、よき気候がおとずれていることと思います。

その後は長らくご無沙汰にうちすぎ、まことに申し訳ありません。みなみなさまには、ますます健在にて食糧増産に日夜ご精進のよし、何よりです。こちらもあいかわらず元気でご奉公をいたしていますゆえ、なにとぞご休心ください。

みち子は本年卒業ですね。家にいたころはからだも丈夫な方でなかったし、お母さんも自分が家にいた時からのつもりらしかったから、みち子の学校の件は、父上の希望もよかろうと思います。

義治の入団もいよいよ近づいて来ましたが、見送ることはできないと思います。また、当分だめだろうと思いますから、本年度の仕事も自分は入れないつもりでやってくださる方がよいと思います。

三月五日に外出して、防寒帽にて写真を撮りました（あい変らずの三ツ星ですが）

元気な姿にて、毎日大過なくご奉公していることを、何よりと喜んでいただければと思っています。

同封にて一枚送付いたしますればお受け取り下さい。

ではみなさまおん身大切に。ではまた。

三月十九日

奥島宗男

父上様

奥島宗男さん関係資料　手紙３通

手紙：満洲牡丹江の奥島宗男さんより 家族あて

（昭和？年九月）

拝啓　初秋の折がら、家内みなさまにはご壮健にて秋の準備にご多忙のこととお察しいたします。

私もあいかわらず元気にて働いていますから、ご安心下さい。毎日室内にて鉛筆を手に勉強をしています。

「美恵子の手紙によると、お母さんが毎日お宮様へ参っていて下さるとのこと。また、妹たち三人で兄さんの分までと、一生懸命お手伝しているそうですね。兄さんはうれしいです。うんと勉強して下さい」

このたよりが着くころは、丁度椿神社の二千六百年祭が行なわれる前後でしょう。その時は親類もみなこられることと思います。出発の時、山上の叔父さんにお忙がしい中を広島ま

で送ってくだされ、いろいろと厄介になって、愉快に広島を出発しました。もしこられたら、よろしくお礼をいっておいてくださるよう、お願いいたします。
兄弟が同じ満洲に来て、遠く離れて出会うことはできぬが「一重」の心境も十分に察することができます。
また、村では尾崎先生、美濃部先生のお便りに、銃後国民生活の改善のため、十月一日より村一斉に、冠婚・葬祭・出産・その他一般生活に、真剣なる生活体制が実施されるそうですね。いろいろ協議会などにて多忙のことと思います。
本年もまた順調なる気候にて、豊年の予想らしいとのことを聞き、農家にはうれしいことです。
今後とも一生懸命働く覚悟です。どうかみなさま十分おん身大切になしくだされますようお願いいたします。
　ご家内 みなさま　　奥島宗男

手紙：満洲牡丹江の奥島宗男さんより　母あて

（昭和十六年四月十三日）

拝啓　三月五日付のお母さんのおたより拝見いたしました。
家の者みな達者にて、田の土持ちにお働きくださるよし、何よりうれしいことであります。
お母さんには三月下旬に佐山村国防婦人会幹事以上の者と、中部三十七部隊に慰問に行かれ兵舎内を見学してこられたそうですね。
本年の祭はよき天候にて、また勝之も入店後はじめて祭に帰って来たそうですね。義治も勝之もともに元気にて、店務に精励のよし、何よりです。
その後、あいかわらず元気にてご奉公いたしています。ご安心ください。宗男も三月一日付にて陸軍一等兵に進級いたしましたからご休心ください。すみ子も本年より改正されたる国民学校へ元気にて入学したそうですね。毎日三人そろって通学していることでしょう。
満洲も今日このごろでは、内地の三月中旬くらいの気候であります。そうして今は満洲も月夜であります。満洲の月夜も実によいものであります。大陸気候にてそのうちに木や草が急に芽を吹き出すことでしょう。また、風が吹くと土ボコリが舞いあがって一面黄色く、先が見えぬくらいで、風に向かって歩けば目もあけられぬくらいです。
家内のみなさま、おん身ご自愛くださるよう、宗男もますます緊張して一生懸命ご奉公いたす覚悟ですから、なにとぞご安心ください。
　まずは返信かたがた近況お知らせまで。
　四月十三日
　宗男より
　家内みなさまへ
　母上様

手紙：満蒙開拓青少年義勇軍の奥島一重さんより　父あて

（昭和？年八月二日）

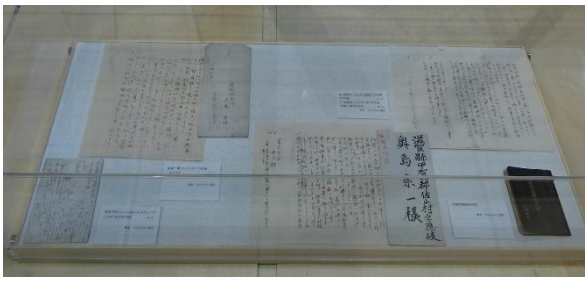
満洲の今月このごろは、内地の秋のようだ。一昨日お手紙ならびにお守二神、ありがたくいただきお礼申上げます。
昨日写真も到着、拝見いたし、内地のみなさまをしのび懐しく感じました。椿神社は入隊後第一の護神といたしたく存じおります。父母の写真お守袋に入れるため、名刺判くらいのあれば満々でよいからお願いいたします。
妹等たいへん大きくなったね。勉強もよくできるそうで喜んでおります。ロープ、ご多忙中ぬって下さったそうですね。すみませんでした。小包発送不可能なること知り、当方店に売買いたしておること知り、買いだめましたゆえ、その段ご諒承くだされたし。本年度帰宅は、特別帰郷できないことと思います。
同級会会誌原稿出しました。確実にやっておるようなれど、退会取り止めくだされたし。福島氏にも知らしておきましたゆえよろしく。内地も都合で帰れるとなれば通知いたします。まず、できないだろう。
いま元気に小麦の刈り取りに精励いたしております。本年は水不足がちであったため、できはたいしたことはありません。
将来のことには、自分もいろいろ考えておるが、軍隊もあることゆえ、時期を待つほかなしと思っております。いろいろ心配かけ、すみませんでした。
まず元気におり、ご安心。第一健全なる身体です。
みなさまおん身大切に。
　北満の
　一重より
　父上へ

絵ハガキ：満洲牡丹江の奥島宗男さんより 妹すみ子さんあて

（年月日不明）

学校からのすみ子のお便りを受け取りました。便りが書けるようになってうれしいことと思います。
家もみな達者とのこと、何よりうれしいことです。兄さんのいまいる牡丹江（※満洲の川）は一面銀世界。雪で遠くに見える山々が絵のように美しく輝いています。いまは零下二十七、八

度ですが、兄さんも寒さに負けず元気で北のまもりに務めています。
便りがつくころは、うれしい正月も済んで三学期の勉強が始まるころですが、お友達とは仲よくし、毎日先生のお話しをよく聞いてうんと勉強して立派な人にならねばなりません。
では、おからだを大切に。
　満州の兄さんより
さようなら



奥島宗男さん・一重さん関係資料　自動車運転免許証、手紙３通（左上が一重さんのもの）、ハガキ１通

左：絵ハガキ「斉斉哈爾名所」
右：奥島宗男さん関係写真　奥島すみ子さん提供

第２章　妻へ　子どもへ

「毎日毎夜、
お前のことを思わないときはないのだ」
西澤久一さん（東近江市[旧八日市市]出身）

◇大正元年(1912 年)　生まれ
◇昭和 18 年 4 月、9 歳年下の八重さんと結婚。
◇結婚の 4 ヶ月後、応召して 32 歳で横須賀海兵団入団。
◇19 年 1 月、娘の美重子さんが誕生。まもなく南方へ出発。
◇19 年 6 月、ニューギニア・ビアク島で戦死。
新婚まもない夫婦の愛情あふれた手紙を送っています。久一さんは何かにつけ若い八重さんをいたわりながら、農作業に従事していたといいます。
この手紙は八重さんが亡くなったあと、娘の美重子さんが見つけたもの。八重さんは手紙のことを話しておられませんでした。

手紙：横須賀の西澤久一さんより 八重子さんあて
（昭和十八年月日不明）

八重よ、小生は幸福者だ。家の父上様はじめみなさま方、柴原南の父上はじめみなさまがわが子のようにしてくださる。幸福者だ、とてもうれしい。柴原南の父が先日面会に、遠い所お出でくださいまして、くたびれが出なかっただろうか。いろいろな話を一日、どこも出ないで話をした。もう、小生も満足をした。お前より充分お礼申しておいてくれ、お願いする。
夫婦の仲は、こんなものかなあーと自分ながら感心しているよ。毎日毎夜、お前のことを思わない時はないのだ。朝六時起床、八重は今何をしているのだろうか。小生のため、不自由な身でお宮参りをしてくれているのかと。また、演習場へ行く道では、家にいる時に二人が仕事に仲良く行ったことが眼にうつる。夜八時に寝たときは、八重は今ごろ、愛の結晶、可愛い子供の針仕事だろうか、またなにをしているだろうか、と。さびしい時にはよけい身にしみる。こんな弱き心であるが、かんにんしてくれ、二人の仲だもの。
出発も近くなって来た。いろいろな話は柴原南の父にも話をしておいたが、小生留守中は、母上様のため、子供のため、働いてくれ。軍人らしき妻にて教育をしてくれ。
小生、帰った時には、可愛い自分の子供が、かあちゃんとお手々をつないで迎えに来てくれるを、今よりたのしみにしているゆえ、たのむ。また、仕事の方もあまり無理をしないように、自分の力できばれるだけ、きばったらよいのだ。
お前はいったん家へきたならば、小生にどんなことがあっても家の者だ。子供をよく教育して、そだててくれ、お願いする。
小生は両父上様に出会って心が安心したゆえ、また多忙ゆえあまり手紙出さないが、おこってくれるな、たのむ。けれども、すまないが家のことがわからんゆえ、お前はちょくちょく手

紙を下さい。お願い申します。
お前は今、大事なからだ。充分あたたかくしてくれ。小生のネルの半ずぼんがある。また、いつも着物の下に着てあったネルの半シャツがあるから着るよう。小生の物ならなんでもよいゆえ、出して着てくれ。かまわないから。
そうして元気のよい子供を産んでくれ。小生がおらないゆえ、さびしいだろうが、これまたしようがない。だが、小生と同じように、両親が四人もおられるゆえ、何の心配もする必要がない。
二日出の手紙に、小生が女はいやだといったというが、それはじょうだんだよ。小生のほんとうの心は、八重が無事に男でも女でもかまわないから、ただ安産してくれるのを、小生、今でも神に祈っているのだよ。小生の心、わかってくれたか。
小生の心はそんな心ではないから、たとえば召集がきた時、お前にやかましくいっておったが、小生は、その時まだ八重子をしかっておっただろう。そうゆうわけで口ではなんでもいうが、心ではそうとう心配しているのだよ。わしの心がわかってくれたらうれしい。なんといっても夫婦仲だもの、毎日お前の写真を見ない時はない。一日にすくなくて三度くらいは見るよ。夫婦仲というものはおそろしいものだね。そうだそうだ、夫婦の仲だもの、あたり前だ。
八重子、何度もいうが、大切な身だから充分あたたかくしてくれ。そうして、安産してくれ。お祈りしているよ。出発の日も近づいた。小生も充分体を大切にするから安心してくれ。お前の手紙をたのしみにまっているから、たのむ。
八重よ、お前は軍人の妻だ、しっかりした気をもってくれ。小生も軍人だ。小さい気はもたない。小生がおらないゆえ、さびしいことだろう。だが小生もさびしいのだ。これもおたがいだ。日本も今はめでたき正月ではないのだ。小生も覚悟はきめている。お前も、充分小生の心を察してくれ。（だが、なにも心配する必要ない。命あってのもの種だもの）
また、二人の楽しい時もきっとくるからたのしみにしてくれ。二月になれば愛の結晶が生まれるではないか。子供をたのしんで帰ってくるまでくらしてくれ。小生、帰える時は、子供とお手々をつないで迎えに来てくれ、たのむ。
なんどもいうが、出征家族と思って大きな顔をしないこと。みなさまにすかれるようつきあってくれ。八日市の家とうまく行くよう、お前が良くかじを取って、柴原南・八日市、おもや新家ともども、仲よく行くよう、ほがらかに行くよう、八重にたのむ、お願いする。大西孫兵衛様も仲よくして行くよう。
小生は八日市の兄様、柴原南の父、家の父がおられるゆえ、何も心配しないゆえ、安心してくれ。惣一君の入営を見送れないのが残念だ。だが、しかたがない。元気よく行ってもらうよういってくれ。
家の母上、八日市姉様、柴原南母上に一度会いたい、会いたい。だが、しようがない。面会はしたいが、おん身大切にしてもらってくれ。健康第一だ。久之に一枚渡してくれ。

手紙：横須賀の西澤久一さんより 八重子さんあて

（昭和十八年十二月十三日）

みなさま、元気でおられることと思います。小生、おかげさまで元気元気、安心下さい。
先日お手紙出しましたとおり、十二月十五日より一等水兵になります。一等水兵になれば、半舷外出があります（日曜日で正午より日暮れまで）久しぶりで外出ができます。そのあいだ、自分のからだになりますので、何度もいいにくいことだが、柴原南の父上様に半日外出してゆっくり面会がしたいのです。こんどの日曜日にできるかもわかりませんから、お前より一度お願いしてくれないか、たのむ。もし万一、来て下さるのならば、このごろ腹がへってしようがないから、お前も知っておるとおり、たくさん餅の用意をたのむ。また、いもの焼いたのもよい。炊いたのもよい。ながくのこしてたべられるようなのもよい。
笑ってくれ、食ふばかりのことだ。小生だけじゃないよ。この付近は田が一枚もないのだ。畑ばかりだ。□地だから、いもが多くとれるので思いだす。
地下足袋の配給があったのだけれども、十文半なので小さいゆえ、家にある十文七分の足袋とかえるから、もって来てくれるようたのむ。
もし万一、この月、半舷外出ができないようなことでも、この十九日は朝より休業なので、隊で一日面会ができるからよい（日曜日だから）。
こちらは、出るかと思えばまた居すわりだ。これも作戦の都合上しかたがないけれども、正月までには出るらしいので、もし万一、これが最後になるかもわからないと思って、一度、面会ができればと思ったのだ。あとの話は面会してからの話だ。

手紙：横須賀の西澤久一さんより 八重子さんあて

（昭和十九年一月一日）

八重よ、新年おめでとう。
ご家内一同様ともどもに初の新年を迎え、また、小生も生まれてはじめて他家にて新年を迎え、八重も西澤家ではじめての、

なんともいえない新年なのだ。それが、ともどもに、ご家内一同様、八日市の方、柴原南の方、元気にて、戦しょうの新春を迎えられたが、なによりおめでたき次第です。
小生の一日の生活を書いてみよう。
十二月三十日、朝六時半起床。兵舎はなれ整列、東の方を向きさいけいれい、五か条奉唱、海行かば合唱、故郷に向かって黙祷後、わかれ。七時、兵舎、たいがいそうじ。後、朝食。班三名の食卓番が出る。朝は、みそしる・漬け物だ。
八時半、課業はじめ。本日は朝大そうじをする。ひるより、銃器手入れおよび身まわり整理。いつもお前に洗ってもらっていたが、自分の物は自分がするのだ。しようと思えば何でもない。美しく洗って着ているゆえ、心配してくれるな。夕食、四時十五分、六ごろ間食としてさつまいもむしが二本あり。八時巡警にてねる。
十二月三十一日
いよいよ本日で本年は終わりだ。
朝、六時半起床。朝の課業あり。朝食後、身回り整理。越年準備あり。一日なかなか用事がある。夕食、四時十五分。六時ごろ、むしいも六本配給あり。正月用としてキャラメル一個・ヨウカン一本・菓子一個配給がありました。いよいよ今晩で十八年度は終わりである。八時、巡警終わりて小生一人起き、運動場のまん中にて故郷の方をむき、ふところには写真をいだき、両手をあわして、ご両親様・八日市のみなさま・柴原南のみなさま、他国にて小生は無事元気に越年できるは、みなさまのおかげと感謝いたし、なんとも言われない心でした。兵舎へ帰へったその時は、小生の気は晴れやかになり、ねたまま写真をいだきて、みなさまお休み下さい、今晩はよいゆめを見るよう祈りながらねむりにつきました。
おきてもねても（ねてはシャツのぽけっとの中へ）写真は、はなしたことはない。
　十九年一月一日
朝六時半起床、朝、課業後、朝食（焼もち四きれのもちしる）、九時ようはい式。十時ひる食（白めしにみかん二コ・酒一合・三種サカナであった）。
後、半舷外出。本日は右舷である。小生は明日である。面会を楽しみでいる。

柴原南の父に、惣一君が着るよう、国民服を出してやって下さい。なお、くつも要ったら一緒に。
入営だけじゃない、これから着るようにいって下さい。願いする。

西澤久一さん関係資料　八重子さんの嫁入りかんざし

管野定三さん・松崎寿吉さん関係資料

「滋子も一人歩きで
目がはなせなくなったことと・・」

管野定三さん（福島県出身）

◇昭和８年、大津の東洋レーヨン入社で滋賀に来られた。
◇昭和 15 年 11 月、サトさんと結婚。17 年 2 月に滋子さんをもうけた。
◇18 年 5 月、召集を受け入隊。9 月に湖北省派遣。
◇同年 11 月 7 日、頭部貫通銃創にて戦死。
定三さんも 30 歳ちかい年齢で初入隊されました。本籍地の福島から出征されるので、東京に住む叔父さんのところへ立ち寄って福島へ向かっておられます。
その汽車の中で 1 歳 3 ヶ月の滋子さんが初めて歩きはじめました。定三さんはそれを見納めてゆかれたそうです。

ハガキ：中支の管野定三さんより 妻 サトさんあて

（昭和十八年）

拝啓　時下秋冷の候となりました。
さて、一別以来ご無沙汰しておりましたが、あしからず。田舎におるのか、また東京の●●かとたよりが来るのを待っておりましたが、本日ようやく田舎より●●におるよし、たよりありましたゆえ、さっそくたよりをするところです。やはり●●におることに決まったのですか。これが最善の道であったらうか。

滋子が元気でおるよし、田舎よりたよりあり、安心いたしました。あなたの手で立派な子として育てるようたのみます。あなたから●●●●のこと手続きを願ひます。では近況お知らせまで。おん身大切に。

早々

ハガキ：中支の菅野定三さんより 妻 サトさんあて

（昭和十八年）

前略　その後、かわりなきことと存じます。
小生も元気で軍務に精励しておりますので、他事ながらご安心ください。滋子も一人歩きで、目をはなせなくなったことと存じます。
田舎よりのたよりによれば、元気でいるとのこと、何よりと存じます。父がおらなくとも行儀のよい子を育ててください。おねがいいたします。なお、銃後の守りを充分にしてくれるよう、くれぐれもたのみます。
時節がら、ご自愛ください。まず近況お知らせまで。

早々

ハガキ：中支の菅野定三さんより 妻 サトさんあて

（昭和十八年）

前略
本日●小包確かに頂戴いたしました。
なにとぞご安心ねがいます。さて、おかげで元気
でやっておりますから、他事ながらご休心ください。
できうるかぎりは、ご奉公をする覚悟で
おりますから、小生のことはご心配なく。
銃後の護りをかたく、おねがいいたします。
まず、右お礼まで。みなさまおん身ご自愛
くださるよう申しあげます。

ハガキ：中支の菅野定三さんより 妻 サトさんあて

（昭和十八年）

拝啓　その後おかわりございませんか。小生もあいかわらず元気でおりますゆえ、他事ながらご休心ください。
さて、先般恩賜の煙草をいただきましたので、そのまま送付いたしますゆえ、母上様の方でよろしきよう●●●●おねがい申しあげます。また、サト子にもくれぐれもお伝えくださるよう、おねがいいたします。
では・・またおたよりいたします。●みなさま、おん身大切に。

不一

「できれば適当なものを 少しお送り下さい」

松崎寿吉さん（東近江市[旧八日市市]出身）

◇大正3年(1914年)？　生まれ

◇寿吉さんは朝鮮総督府勤務(釜山)、妻香苗さんは全州の生まれ。昭和13年に結婚、男子(修さん)をもうけた。

◇現役入隊の経験がない寿吉さんは、昭和19年4月、30歳で受けた召集が最初の入隊だった。

◇朝鮮南端の馬山で基礎訓練ののち、19年7月に硫黄島へ派遣。

◇同年12月、戦死公報到着。翌年2月にはじまる米軍上陸作戦にさきだつ、艦砲射撃・空襲の犠牲とみられる。

30歳で初めて入隊された寿吉さん。馬山での訓練中から体調不良をうったえておられます。7月のハガキから発信地は神奈川県・横須賀となっており、派遣先が硫黄島であることがわからないようになっています。
硫黄を含んだ水しか出ない硫黄島から、寿吉さんは薬の送付を何度もたのんでいます。

ハガキ：馬山の松崎寿吉さんより 妻 香苗さんあて

（昭和十九年五月三日）

前略　その後おかわりありませんか。
修も元気で幼稚園にかよっているでしょう。
自分も元気でおりますから、他事ながらご休心下さい。
官舎のみなさまにも　〔検閲抹消〕
そちらよりよろしくお伝えくだされたく。
なお、所長、部長、平井技師宅にもお伝えねがいます。家の方もできればあまり暑くならないうちに、全州に引越した方がよいと思います。
あまり暑くなるとたいへんですから、一回全州の方に問いあわせて見て、都合よければすぐ準備に取りかかってください。
あまり無理せぬように、身体に気を付けてくらしてください。

ハガキ：馬山の松崎寿吉さんより 妻 香苗さんあて

（昭和十九年五月三十一日）

二十七日付書かんの写真受け取った。みな元気とのこと、何よりです。自分も元気でいるから安心してくれ。
全州に行くの、できれば六月いっぱいくらい見あわせたらと思うが、そちらの都合が悪ければ適当にやってもよい。もしむこうに行った場合は、すぐに連絡してくれ。
役所と城さんには先日礼状出しておいた。みんなに出すわけに行かぬのでよろしく伝えてくれ。今度送ってもらう時に「タ

ムシ」の薬「ショウコウ水」、もしくわ「サルチルサン水」を少しをたのむ。
甘いもの、入手困難の場合は無理しなくてもよろしい。平井さんにもおりがあればたよりする予定。くれぐれも身体を大切に。また次便にて。

ハガキ：馬山の松崎寿吉さんより 妻 香苗さんあて

（昭和十九年六月十三日）

前略　その後おかわりありませんか。これから日ましに暑くなるので、修も食べ過ぎないように注意してください。自分も、いぜんとして身体が判然とせず、休養しています。油ものや肉類は食べてはいかんもので、副食物〔ばかりで〕閉口しています。できれば適当なもの少しお送り下さい。例えば「海の幸」、海苔の「つくだに」「うに」などのようなもの。
まずは乱筆にておねがいまで。

ハガキ：馬山の松崎寿吉さん より妻 香苗さん あて

（昭和十九年七～八月）

修はじめ、みな元気ですか。修も暑中休暇で毎日悪いことばかりしていることと思います。全州に引越して遊び友達はできたでしょうね。
お母さんたちも元気ですか。雲浦に現在行っておられますが、自分もあいかわらず元気で働いておりますので、他事ながらご休心ください。
内地の方も役所にも一通あて出しておきました。雲浦の方にもよろしくお伝えください。
そちらからのたよりは左記部隊名にして出してください。
　横須賀郵便局気付　ウ二七謄第一二七一〇部隊　西山隊

ハガキ：硫黄島の松崎寿吉さんより 妻 香苗さんあて

（昭和十九年十月八日）

朝夕、だいぶんすずしくなりました。その後みなさまにはおかわりありませんか。このたよりの以前に二、三回たよりしましたが、無事到着したでしょうか。そちらからのたよりがちょっともありませんので、返事のくるのを一日千秋の思いで待っています。できればそちらのくわしいニュースをお知らせください。くだって自分もあいかわらず元気でくらしておりますれば、他事ながらご休心下さい。つぎにふんどし二、三枚胃腸薬、煙草、滋養物。一回にたくさんにせず、少量ずつ回数を多くおねがいします。
修は元気ですか。だいぶん唄などおぼえてきたことと思います。末筆ながららみなさまのご健康をお祈りいたします。
不一

ハガキ：硫黄島の松崎寿吉さんより 妻 松崎香苗さん

（昭和十九年十月二十四日）

朝晩は●常のすずしく感じ●●。その後お前も子供も元気のことと思う。自分も元気でやっているから安心してくれ。
なお、勝手ながらら梅肉エキス、ニンニクエキス、仁丹を二箱あてくらい見つくろって、至急送ってください。荷造りは途中破損せざるよう注意しなさい。
気候不順のおりから、からだに充分気をつけて
子供も風邪を引かせぬよう注意しなさい。
近所のみなさまにもなにとぞよろしく申してください。
ではまた、おたよりすることにする。

バナー写真：左上 管野定三さん（管野サトさん提供）
右上 安藤太良さん（安藤良枝さん提供）
左下 西村浅吉さん（西村宏一郎さん提供）
右下 井上外次さんとご家族（井上桂一さん提供）

管野定三さん関係資料

寄せ書き日の丸、奉公袋、お守り、貴重品袋、戦死通知書、財布、ハガキ３枚

松崎寿吉さん関係資料

千人針、お守り袋、お守り、簡易髭剃り、財布、鏡、軍隊手帳、ハガキ６枚

【届かなかった写真】　　安藤良枝さん

安藤太良さんは、昭和 16 年になおさんと結婚。2 年後に召集を受けて、お腹にいた良枝さんをおいて征かれました。

お父さんは、出て行くときに、私の名前を付けて行かはったそうです。上に二人できたんやけど流れてしもて、私がはじめての子やったから。

母親は私の写真をお父さんに送りたいと、写真館に家へ来てもろて撮ったんです。私が生まれて 13 日目。速達で敦賀に送ったけど、写真が着く前日に移動してしまわはって、写真が返ってきたんです。

そしたら、今度はお父さんが泊まってる鹿児島の民宿のご主人から、写真を送ってあげてほしいと手紙が来たんです。母親はすぐに送ったんですけど、また手紙が着いたのは父親が出たあとで。ご主人は港まで持っていってくれはったそうですけどね。それで、また写真が戻って来ました。

父親は昭和 19 年 11 月 11 日にニューギニアで戦死しました。

太良さんに送るはずだった写真　安藤良枝さん提供

【パラオで戦死した夫 正忍】　　土田千代さん

土田正忍さんと千代さんは昭和 15 年 3 月に結婚。2 男をもうけて、18 年に応召。舞鶴からパラオへ征かれました。

夫は、大阪のディーゼルエ場で勉強をしてきて、村の揚水場の操作のほかに、秋はリヤカーに機械を積んで各戸で籾すりをしてました。みなから村の宝や、ていうてもろてたんです。

出征で家を出ていくとき、髪の毛とへその緒をおいていきました。

終戦のあと、そのうち夫も帰ってくるやろう、と念じてたんですが、ある日、主人が夢に出てきまして。白い着物を着て、村の地蔵堂に腰をかけてはる。「何しているの、早く家へ帰ってきて」というたところで目がさめたんです。そしたらまもなく、戦友という人が来られて「ご主人は、パラオ島で病気で亡くなられました」と教えて下さったんです。

展示品は正忍さんが持っていたお守、名刺入れ、これに入っていた家族の写真。

土田正忍さん関係資料

名刺入れ、名刺入れに入っていた写真、お守り入れ、お守り

「でんしゃみちへ あそびに行ってはいけません」

西村浅吉さん（東近江市[旧八日市市]出身）

◇明治41年(1908年)生まれ

◇日中戦争で兵役を務めたあと、東洋レーヨンに勤務。
節さんと結婚し、二男（宏一郎さん・武さん）をもうけた。

◇昭和18年秋、36歳にしてふたたび召集。宏一郎さん6歳、武さん6ヶ月。

◇20年5月、ニューギニアで戦死。亡くなった時のことは何もわからないという。

浅吉さんのハガキでは、かならず男の子2人の様子をたずねています。誕生日に言葉をかけることも忘れておられません。ようやくカナが読めるようになった宏一郎さんのために、カタカナ書きのハガキを2通送っておられました。

ハガキ：ニューギニアの西村浅吉さんより 父栄治郎さんあて
（昭和十九年四月一日）

その後、ながらくご無沙汰しました。父上様はおかわりありませんか。宏一郎は元気で学校へかよっておりますか。成績はどうですか。武は達者で成育しておりますか。宏一郎の誕生まで五十三日になりましたね。今年は二年生になりますね。私は至極元気ですから、ご安心ください。病気もいたしません。布施の西澤友治郎君に時々出会います。元気でおられます。内地の情況が少しもわかりません。この通信がとどいたら書留郵便で返事をねがいます。往復半年くらいかかるでしょう。赤道直下ですが、思っていたよりは暑くありません。内地は今ごろ大寒で毎日寒い、雪が降っていることでしょう。栄造は帰還しましたか。敬造や正一やきみはみな元気ですか。おりがあればよろしく伝えて下さい。

通信一ヶ月に二通しか出せません。寒さのおりから、身体に気をつけなさい。

私の事は心配いりません。子供に怪我をさせぬようたのむ。

では さようなら

ハガキ：ニューギニアの西村浅吉さんより 父栄治郎さんあて
（昭和十九年六月二十日）

上陸以来待ちに待った第一信は、本日いただきました。いろいろとかわったことがありましたね。母上様がご病気が重く、昨年十月二十四日についに亡くなられたそうですが、私は夢かとばかりに驚きました。お前のお父さんもたいそう気を落していなさることでしょう。お前も気を落さないよふにして、家のことを手伝ってあげてください。子どものことについては安心しました。みな達者で結構。栄造は帰ったそうですね。敬造は軍属で南京に、源治様はお元気で泰国にご奉公続けおられるよし、まことにご苦労です。お前のお父さんに、くれぐれもよろしく伝えて下さい。

おつかれが出ぬようにとね。小生は元気です。心配無用。

宏一郎の誕生日、今日で三日すぎましたね。この通信の行くころはもう二年生の一学期です。　　さようなら。

ハガキ：ニューギニアの西村浅吉さんより 息子 宏一郎さんあて
（昭和十九年六月二十二日）

〔原文はカタカナ〕

宏一郎　おてがみ　ありがとう。たいへん　じが　じょうずになりましたね。まいにち　げんきで　学校へ行っているとのこと、お父さんは　あんしんしました。

お父さんは　げんきで、てんのうへいかのため　たたかっておりますから、宏一郎も　からだをじょうぶにして、いっしょうけんめいに　べんきょうしなさい。学校のせんせいや　お母さんの　ゆうことを　よくききなさい。いけや　たけやぶなど　あぶないところで　あそんでは　いけません。

もう　にねんせい　ですね。たけしを　かわいがって　やりなさい。

おとうさんが　かえったら、せんそうの　おはなしを　うんとして　あげましょう。おばあさんが　おなくなりになってさびしいでしょう。

おはかへ　まいりましたか。　　さようなら。

ハガキ：ニューギニアの西村浅吉さんより 父栄治郎さんあて
（昭和十九年六月二十二日）

今日は宏一郎の誕生日ですね。武は大きくなりましたか。

栄造はいかがでしょう。帰りましたか。私は元気でおりますから、ご安心ください。内地からのたよりは、まだ一度も受取っておりません。

彼岸もすぎましたから、内地はもうだいぶん暖かでしょう。今に桜が咲きます。当地は常夏の暑さです。見渡すかぎりの森林は年中青々としております。村にかわったことがあったら知らしてください。子どもらの健康に注意してください。

時候のかわりめゆえ、おん身大切に。　　さようなら

返事ハ書留ニテタノム

ハガキ：ニューギニアの西村浅吉さんより 息子 宏一郎さんあて
（昭和十九年九月二十三日）

〔原文はカタカナ〕
宏一郎くん、ながらく　こぶさたしました。げんきでまいにちがっこうに　いっておりますか。武は大きくなって　もうよく　あるくでしょう。お父さんは　げんきで　たたかっておりますから、あんしんして下さい。ないちは　もう　だいぶんあつくなって　いるでしょう。びょうきや　けがを　せぬようにしなさい。
お母さんやおじさんは　げんきでおられますか。お宮さんへおまいりしておりますか。でんしゃみちや　いけへ　あそびに行っては　いけません。
せんせいや　お母さんの　ゆうことを　よくききなさい。
お父さんの　いるところは　あついあついくにで、みわたすかぎり　ジャングルです。ぶじで　かえれたら　せんそうのはなしを　うんとしてあげます。
それをたのしみに　まっていなさい。なまみず　なんか　のまぬようにしなさい。
びょうきをしては　がっこうを　やすまなくては　なりませんから、からだにきをつけなさい。　　さようなら

「[長男]ちゃん [弟]を泣かしてはいけないよ」
Ｈさん（彦根市出身）

◇明治 41 年(1908 年)生まれ
◇昭和 12 年に結婚。二男をもうけた。
◇家は証券会社を経営する大家族。17 年 8 月に父が亡くなり、事業を引き継いであいさつ回りをしていた 18 年元旦に召集令状が届いた。
◇2 年たらずで音信不通になり、戦後届いた通知で 19 年 8 月に戦死されたことが分かった。

Ｈさんは、中国で 3 ヵ月の教育訓練を受けたことがありましたが、目が悪かったので召集はないと思っていました。出征から 2 年たらずで便りが来なくなり、ラバウルに移動することを暗示するハガキが最後でした。
紹介したハガキは、子どもあてに送られたカタカナ書きの絵ハガキです。

ハガキ：南洋のＨさんより 息子あて
(昭和十八年五月二十五日)

[長男の名前]ちゃん
四月から幼稚園行きだね。毎日行っていますか。
ばあちゃんに送ってもらっているのか。強いのだからひとりで行きなさい。
[次男の名前]を泣かしてはいけないよ。おばあちゃんのいうこと、お母ちゃんのいうことをよくきいて、かしこい子になってください。お父さんは楽しみにしています。
　さようなら

ハガキ：南洋のＨさんより 息子二人 あて
(昭和十八年九月二十三日)

〔原文カタカナ〕
[長男の名前]ちゃんお母さんからのたよりではたいへん利口になって毎日休まず幼稚園へ行っているとのこと。お父さんはたいへん喜んでいます。ますますお母さんお祖母さんのいうことをきいて、かしこいよい子どもになってください。
[次男の名前]ちゃん、兄ちゃんのいうことをきいて、聞き分けよくし、喧嘩をしてはいけませんよ。また、食べ過ぎておなかをこわさぬようにしなさい。
二人とも絵をかいて送ってくれましたね。どうもありがとう。
また、手紙書きます。さようなら。

Ｈさん（上段左の 2 点）、西村浅吉さん（それ以外）のハガキ

「暑さに負けないで体を鍛えなさい」
井上外次さん（東近江市[旧八日市市]出身）

◇大正 2 年(1913 年)生まれ
◇昭和 9 年、ヤエさんと結婚。
　上から桂一さん、喜久子さん、次雄さんをもうける。
◇18 年 12 月、召集令状が届き、フィリピンへ派遣。
◇19 年、父喜蔵さんが病没。跡取りが召集されたのがショックだったという。
◇20 年 7 月、ルソン島カヤバ山中にて戦病死。

外次さんは令状を受け取る前に紹介している遺書を準備していて、死ぬようなことがあるまでおいておいてくれ、と言い残してゆかれました。
ヤエさんあて、桂一さんあて、家族あてのハガキを紹介しています。

遺言：平壌の井上外次さんより 家族あて

（昭和十八年七月二十日）

遺言状　　井上外次

お父上様

今日まで、ご養育くだされしご高恩瞬時も忘れておりませんでした。ご健勝にて長寿お祈りしております。

妻へ

遺族として同情に甘えるな。今より一層雄々しく世に処して行け。三児の教育はお前に安心してたくす。結婚以来十ヶ年、ともに苦しみ、ともに楽しんだ。

今世の短きを思うな。私は誓ってお前とともにあり。

桂一へ

父は皇国の華と咲く。父がなしえざりし百姓の問題がめいめいある。断じて祖業を守れ。教育は農学校をおえよ。

繰り返す。断じて農業につけ。

喜久子へ

お母さんの言いつけをよく聞け。そして家事を助けよ。靖国の父は海を渡るぞ。

次雄へ

成長すれば父に続け。陸海空いずれなりとも希望は述べず、忠誠一途、帝国の軍人たれ。

ハガキ：平壌の井上外次さんより 家族あて

（昭和十九年七月五日）

謹啓　初夏の候、家内一同お達者にて食糧増産戦にご健闘おんことと拝察もうしております。その後私も非常に壮健でおりますゆえご安心ください。半次叔父様の御田祭とどこおりなくすんだでしょう。昨日敦賀の嘉へ兄より元気なおたよりいただき、小生もよろこんでおります。日々重大なる血戦と宿敵米英撃滅のため、ご一同おん身自愛のうえ、増産の戦闘にご精励ください。せつにみなみなのこと、健康を祈っております。さようなら。

ハガキ：平壌の井上外次さんより 息子 桂一さんあて

（昭和十九年？月二十一日）

桂一、おたよりありがう。夏休みで草をかったり、薬草を取ったり、お忙しいそうですね。暑さに負けないで体を鍛えなさい。一学期の成績見ました。もう少し勉強してこんどの二学期には優ばかりになるよう、父ちゃんは待っています。

でも、図画は優ですね。一度画を書いて送ってほしいね。

お心づくしの品々、無事に受取りました。久しぶりに家郷の味を分隊一同満喫しました。ありがとう。安心してほしい。家督相続税の件については、古澤のお父さんに色々相談ですね。お礼をいって下さい。自分はいたって健康です。体重よほど増してはりきっています。喜久子と次雄の成育に充分気をつけておやりなさい。

さようなら。家内一同の健勝を祈ります。また桂一の成績物は皆んな残しておくこと

ハガキ：平壌の井上外次さんより 妻 ヤエさんあて

（昭和十九年夏）

厳暑にうち勝って、家郷一同無事壮健のことと思います。その後自分もおかげをもって健勝にて軍務に精励していますゆえ、安心ください。ちょうどお盆ですね。

大恩ある父上の新盆です。家事育児に多忙でしょうが、精霊へのお供養とご冥福、充分にお祀りあるようねがいます。長門の姉上よりのおたよりによれば、大麦小麦の供出も親類の方々のおたすけにて果たされたよし。銃後の妻として、いつも雄々しく敢闘、立派に食糧増産をもって報国のことするをつねづねながらねがっておきます。　また。

「至極元気にてご奉公しております」

勝見益治郎さん（蒲生郡竜王町出身）

◇明治41年(1908年)生まれ

◇日中戦争に従軍し、帰郷。

◇12歳年下の一恵さんと結婚し、昭和17年、美智子さん誕生。

◇ふたたび召集を受け、妻子をおいて敦賀に入隊。

◇20年1月、西部ニューギニアにてマラリアで戦病死。

益治郎さんが日中戦争に応召されたときには30歳前後、ふたたび召集されたときは40歳近かったと思われます。

敦賀の面会で会えなかった愛娘の写真を送るよう、ハガキで伝えています。

翻刻したハガキにある勝見幸市さんは滋賀師範の学生で、弟か甥と思われます。

勝見益治郎さんの妻 一恵さんと娘 美智子さん

勝見一恵さん提供

ハガキ：ニューギニアの勝見益治郎さんより 妻一恵さんあて

（年月日不詳）

拝啓　みなさまご壮健でございますか、おうかがい申します。その後、ご無沙汰いたしお許しください。私も至極元気にてご奉公しおりますからご休心してください。内地も三月になり、だんだんと暖くなることでしょう。まだこちらへは手紙は一通も着きません。今後は書留にして送ってくださるよう。美智子の写真を送って下さい。親類の方にご無沙汰しておりますがおわび申し伝えくださるよう。どうかご家内一同様お身体を大切になしくださるよう、ご健康をお祈り申しあげます。まずはおうかがいまで。

草々

ハガキ：ニューギニアの勝見益治郎さんより 妻一恵さんあて

（年月日不詳）

拝啓　その後は長らくご無沙汰しましてお許しください。

母上様はじめ一同達者ですか、おうかがいいたします。私もおかげさまにて、元気にてご奉公さしていただいておりますからご休心してください。もうあと十日たてばお祭りですね。

内地もくらしよい気候になったでしょう。こちらへくださるたよりは書留で送ってください。家庭にたいした事故はない、無事であるか否をお知らせをたのみます。時候農繁期になりますから、おん身を十分大切にして無理をしないようにして壮健におくらしをお祈り申しあげます。

草々

ハガキ：ニューギニアの勝見益治郎さんより 滋賀師範の幸市さんあて

（年月日不詳）

拝啓　その後元気で勉強しておりますか、おうかがいいたします。長らくご無沙汰してすみません。

私もおかげさまにて、元気でご奉公いたしおりますから、ご休心して下さい。母上様はじめ、ご壮健と思っておりますがお知らせください。

陸軍記念日もまぢかになりました。内地も暖かくなったでしょう。まずお身体を大切にして、元気で勉強してください。伝統・報恩ということを充分ご実行くださるよう。

次に幸市君、できうるかぎり滋養と栄養に努め、兵隊に来てもたえうるだけの体力を作らねばなりません。まずはうかがいまで。

草々

絵ハガキ：ニューギニアの勝見益治郎さんより 滋賀師範の幸市さんあて

（年月日不詳）

前略　その後ご無沙汰しておりおゆるしください。元気に勉強しておることと思っております。次に私、元気でご奉公いたしおりますから、ご休心してください。黒んぼの土人ははだかで、裏か表かわからんようなものです。

今ジャングルの中に生活しております。椰子とバナナは南洋の名物ですが、バナナは取りに行くのもじゃまくさいのと、ひまもないので、たくさんは食べられません。かわっためずらしいことは後便にて。内地のことも知らしてください。

時候がら身体を大切にして、ますます元気をお祈りいたします。

草々

「ご無沙汰と書きたいが、毎日のようにたよりしているからな」

Ｔさん（犬上郡豊郷町出身）

◇明治45年(1912年)生まれ

◇自宅はバス・タクシー会社を経営していた。

◇結婚して6ヶ月後の昭和13年、一児を残して、応召。満洲の留守部隊に所属しておられたらしい。

◇2人目が生まれた16年7月、2度目の召集。今度は仏印を経て、ニューギニアに派遣。

◇20年5月、ニューギニアで戦死。亡くなった時のことは何もわからないという。

夫婦が毎日のようにハガキを書き送っておられます。妻が切り盛りする会社の経営、親族のことがら、子どものことなど、日常の会話をハガキでやり取りされています。差出年がない

ため整理しきれていませんが、一度に2～3通送ることもあったようです。

絵ハガキ：満洲のＴさんより 妻あて（昭和？年四月二十九日）

［妻の名前］よ、おれは遠い異国に来た。気候も内地とかわらない。

たいへん元気でいるから安心してくれ。出発以来、毎日走る列車の中でくらしている。食べてはねむり、さめては車外の景色、風景、見る物すべてめずらしく思う。車内はみなシャツ一枚で、売子も来るから、ほしい物を食べている。

松尾の●●伍長は、四平街という駅で別れて任地へ行かれた。僕らは新京で一度降りたが、二時間ほどしてまた列車に乗り、意外な方へ向って出発した。任地に到着は今晩の夜中らしい。いずれ到着後はたよりする。

火の用心、みんな仲よく、からだを大切に。営業をしっかりやれ。留守を守る妻らしくせよ。みなさまによろしく。

ハガキ：釜山？のＴさんより 妻あて

（昭和十三年八月二十七日）

昨夜十時半、歓呼の声に送られて、君が代の合唱とともにテープは切れて、内地をはなれた。なんだか変な気持だった。船内の暑さは格別だったが、まただいぶん海もあれたようですが、つかれ切っているので、知らずに寝入ってしまった。目がさめると夜が明けていた。まもなく船は着いた。午前十一時四十分、○○発列車で任地に向う。

至極元気だから安心してくれ。市内見物をしている。長旅でつかれた。まだ、これから任地までたいへんだ。

どうかみんな仲よく元気でくらせ　　さようなら

ハガキ：満洲のＴさんより 妻あて（昭和十三年八月三十日）

連続ハガキの途中の一枚

あいかわらずみんな元気で何よりだ。僕も元気でご奉公している。

二十二日出のたよりによれば、ガソリンの配給が停止されるとか。驚いております。でも急に停止されるのではなく、次第に減じられて行くのだろうと思う。急に代用燃料にすることもできぬだらうし、発生炉の製造ができないことと思う。しかし当然来るべきことと想像されます。昨日も木炭車について注意していただく点を書き送っておいたが、今までそう故障で休むほどのこともなかったのだが、次第に慣れてくださることと思う。慣れて来れば原因はすぐわかります。コンマーシャルに木炭ガス発生炉を取付けてはとのことですが、全然駄目です。スプリングもたぬし、強くすればリムおよびタイヤーがもちません。できうることなら、四七六号車に金を入れて完全なものにすることがよいと思う。もしシートのスプリングが手に入るようなれば、全部取かえていただきたいと思っておる。僕もそれは前から思っていたがスプリングが、手に入らなかった。

ハガキ：満洲のＴさんより 妻あて（昭和十三年八月三十日）

連続ハガキの途中の一枚

第三伸

ガス用木炭はまだ八月末現在で七○○袋くらいはあるはずだから、五ヶ月くらいは大丈夫と思うが、不足しておる折がら、早い目に申込むこと。

ガソリンはできるだけ引延ばして、一ヶ月おくれに使用できればよい。現在そんなふうになっていると思う。モービルオイル十缶申込んであるとのこと、空缶は柵（車庫）のうえにあるから使用するとよい。石油が同じ所に三缶くらいあるはずだ。必要に応じて使用すればよい。

お前も苦労が多くてたいへんだと思うが、五人の子どもと病人のお婆さんをかかえて、女手一人の●●子さんは、お前以上の苦労をされるのだ。その二人でたよりを待っているようだが、心配は無用だ。二人で勝手な推察をしているようだが、なんとでも思うがよい。お前の送るたよりは全部僕の手元に届くから心配せずに送ってくれ。こちらは、そうは問屋の方で卸してくれないからネ。

留守中餞別もらったようだが、全部控えてほしい。お返しするよう申した以外、いただいた分は今度知らせ。

さようなら

手紙：満洲のＴさんより 妻あて　（昭和十三年九月三日）

前略　意外のご無沙汰いたしております、と書きたいが毎日のようにたよりしているんだからな。そちらの方がご無沙汰だよ。でも仕方がないネ。遠くはなれて、今までは片たよりだから、これからは任地が定まったのだから、ちょくちょくたよりをしてくれろ。別れてから、考えて見りゃァ、まだ十日ほどだ。だが、長らくあわないような気がするのだ。せめて夢でも見ようと思うんだが、お前の方で会う気がないからだめだよ。このあいだ、列車の中で弁当食べようとやりかけたところ、はしが二つに折れて、何だか不愉快な気分におそわれたので、早くお前から真実なみんな元気であるというたよりがほしいん

だ。それから写真なんか送ってくれよ。●●君に出発する時もたのんでおいたのだ。遠い北満の空で出して見るのも、馬鹿な男だからなぐさめにもなるのだ。
それから、夜なんかちょっと寒いからネ。またすぐ寒くなるだろうから、毛メリヤスのハラマキ、チョッキ、シャツ、ズボン下など送ってほしい。現在のところでは、零下二、三〇度だそうだが、まだ北に向うかも知れないからなー。
でも、そんなに心配したことはないんだ。来て見りゃ、なんだ毎日班内でごろごろしているんだよ。寒いといったって設備がしてあるからなー。とにかく軍隊に関しては、何も話すことができないから残念だ。
国家のためだ。今のところ外出はできないし、出征以来残したひげ、だいぶん伸びたところだが、剃れというんだ。おしいがしかたない。それから、菊の本を豊郷病院の▲▲さんに貸してあるから、返してもらっておいてくれ。盆栽の松や●木は外に出して水を忘れるな。ソテツは冬になれば家の中に入れろ。菊の水は朝晩二回、■子の仕事にしておくこと。エスは早くよそへやれ。隣がいやがるからなァ。婦人乗を残して一台自転車を売れ。それから四年シボのキャブレーターをはずしてバスの五年シボレーに取付けるように。■■さんの凱旋話はどうだネ。立消えとなりはしないか。それから□そのほか出征軍人の住所を持って来るのを忘れたから、知らしてくれろ。
愛知川署の兄さんはうちで泊っていただくことになったかネ。それだとありがたいのだが。
八月の集金状態はどうか?
姉妹や●●子、留守中は心を合せて一致してやってくれ。[妻の名前]は特にからだに注意せよ。
みんな達者でくらすよう。末筆ながら、□□君や△△君によろしく。
ひまあるごとにたよりくれ。　さようなら
　九月三日午後　　T

ハガキ：満洲のＴさんより 妻あて　（昭和十三年九月九日）
連続ハガキの途中の一枚か

[妻の名前]のたよりは来ません。新聞は十一日出を受けた。●●叔父より営業状況くわしく知らせてくださる。●叔父、隣の■■さんからたよりいただく。四、五日暖かったと思えば、今日はまたとても寒い。机に向ってたよりを書いていると、足先がとても冷えて、耐えられない。純毛の靴下が送ってほしいなァと思う。ズボン下が送ってほしいがネ。お前も母性愛に生き、女らしい道をゆきたい情にかわりはあるまい。僕も家庭の父とて生きたき気持にはかわりないし、現在お前は母親専業はゆるされない。営業を続けながらも子どもを立派に育てえる、留守中の妻でありたい。
　　さようなら

ハガキ：満洲のＴさんより 妻あて（昭和十三年九月十五日）
連続ハガキの途中の一枚

第二伸
バス事業が、今後も木炭車で走って利益になるような見通しがつけば、車台および車体とも新調してもよいと思っている。金の方は何とか都合できると思う。ニッサンにせよトヨタにしても、商工大臣の認可を要するし、発生炉も知事の認可を要す。
ボデーはクラタか後藤ボデーがよいと思うが、申込んでから半年や一ヶ年は待たねばならないだろうし、金は申込みと同時に全額納めねばなるまいと思う。買う方針ともなれば、航空便で返信する。大阪の旭区生江町の東浦自動車工場で、よい中古車が見つかれば都合よいが、それも認可の点で交通課に行って聞いた方がよい。今後は規格が定っているから面倒なことと思う。値段の点よりも、車の程度のよい物を選ぶべきである。もうバスもコンマーシャルシャシーの時代でないからネ。今からみんなで相談のうえ、思案してくれ、たのむ。

手紙：仏印のＴさんより 妻あて　（昭和？年十二月十五日）

前略　毎日あいかわらず暑いことだ。汗を流しご奉公邁進している。
内地はもう雪がちらつくころだネ。子どもたちに風を引かさぬよう、みんな元気でくらしてくれ。大東亜戦争がはじまって俺の身の上を心配しておってくれることと思うが、大丈夫だ。至って元気です。すべてラジオや新聞ニュースで知っていることと思うが、わが日本の戦果は驚くほかないですネ。当地は仏印と軍事協定もなり、地上の敵には心配いりません。
ただ空の敵のみだ。だが、英米なんぞ恐るるにたらず。われに空の護りありです。心ずくしのいろいろ冬物をたくさん送ってくれてありがとう。だが、現在地では不必要なるため、荷物になってこまるから、送り返します。だが、小包通信は厳禁されているので、内地行きの飛行機におねがいするよりいたしかたありません。いろいろ買って送りたき物もあるが、金がないのでいたしかたない。先日、●●君が内地に帰るので、荷物をことづけたが、まだ届いてない様子だが、風のたよりによれば、船がないため、台湾で旅館生活をしているような噂を聞く

から、遠からず届くことだろう。■■兄様が米国ロサンゼルスのお父さんを心配されておられましたが、帰るに帰えれず、生命に別条ないと思うが、みなさまご心配のことと思います。
十二月四日での航空便も受取りました。新聞を送ることは見あわすように書いてあったが、以後送ってくれなくもよろしいです。一ヶ月前の新聞じゃどうもネ。当地は軍報道部の新しいニュースを聞くことができますからネ。たよりも無理してくれなくもよいから、時々たのみます。たいへん忙がしいので、たよりのできないのをさいわいに思うくらいですが、たくさん回送されたみなさまへ返信できないので、申訳ないと思っております。
写真機は紛失するとこまるから、ほしいのだが送ることを見あわせてください。いろいろ聞かせたいが、軍機は秘密で親にも子にも話すことはできません。みなさまへよろしく伝えて下さい。

十二月十五日　　仏印派遣隼第九九三九部隊　T拝

［妻の名前］どの

「妙子の足のようすはどうか」

間宮金三郎さん（大津市出身）

◇昭和16年1月、文子さんと結婚
◇18年、海軍に入団。舞鶴から呉をへて、フィリピン・マニラへ派遣。
◇20年2月、行方不明として戦死公報が届く。

お二人のくわしい経過はわかりませんが、金三郎さんが書き送った呉からの2通、搭乗した船（長運丸）からの1通のハガキを展示しています。
文子さんによると、出征の夜、娘の妙子さんが足にやけどをされたので、金三郎さんは何度もそのことに触れています。

ハガキ：間宮金三郎さんより 妻 文子さんあて

（昭和十八年五月二十八日）

その後、みなさん元気かね。
妙子の足はどうか。たいへん元気でこのようにやんちゃをしていることかね。
母上はいかがなされおるや。俺は元気でいる。南田山の方では茶で多忙なことだったとのこと。手紙に行ったか、そのおりはよろしく伝えよ。また、富美子にもよろしく。嘉茂には懸命にやれとね。ではこれにて
嘉兵治様方へもよろしく。返事不用。　5.27

ハガキ：呉の間宮金三郎さんより 妻 文子さんあて

（昭和十八年六月十四日）

その後、みな元気におることと思う。俺も元気だ。四方の山も霞み、腰をかけると眠たくなるね。呉もなかなか良い。一度来てみい。
返事あり次第、電報にて知らそう。
四、五日泊まる予定で、母上によろしく。またみなにも母の●。
妙子の足のようすはどうか。妙子の方によりそのようすいって来い（はがきで）。
南田山の方によろしく。
嘉兵治様によろしく。さようなら。

ハガキ：長運丸の間宮金三郎さんより 家族あて

（年月日不明）

その後、お母上様はじめ一同元気のよし、何よりだ。
先日勇君よりお手紙をいただいて●安心した。
勝つためには必要だ。お祝の言葉を送った。
お茶も写真も着いた。久方ぶりにて味わった。ありがとう。
妙子の大きくなったのに驚くとともに安心した。
気をつけてやれ。俺も先日〔写真を〕写して、月がかわれば送る。〔俺は〕かわっていない、いや、むしろ太ったようにも思われるよ。
親戚ご一同様にもよろしく伝えよ。

さようなら

「前線の重大なる勤務に服しております」

吉田喜代次さん（近江八幡市出身）

◇大正2年（1913年）？生まれ
◇八日市中学校在学中に父が死去され以来、母一人子一人の家庭となる。
◇満州事変、日中戦争に出征。昭和17年2月に越子さんと結婚。翌年1月に娘美代子さん誕生。
◇19年5月、召集を受け、3度目の出征。
◇20年3月、フィリピン・バナイ島の市街戦で戦死。

伏見連隊におられたときには、近くに住む叔母にあてた手紙を塀の外へ投げ出し、それが妻越子さんのもとへ届けられました。フィリピンからのハガキは、越子さんが何度も泣きながら読んだため、ボロボロになったそうです。展示した手紙は、中国出征中に母信さんあてに書き送ったもの。

ハガキ：中支の吉田喜代次さんより 母 信さんあて

（年月日不明）

拝啓

今日は上陸以来はじめての、なつかしい祖国にたよりをすることになった。その後は母上様には、たいへんにお待ちになったことと察します。

十数日間の航海も無事に、途中二、三港は停泊しながら、任地に上陸いたし、今は至極元気にて南国の〇〇〇〇市において前線の重大なる勤務に服しておりますゆえ、まずは安心ください。

なお、市は内地のごとく、燈火管制などはやかましいことはありませんが、統制経済がありませんので、物価は内地の約二十倍以上です。砂糖も菓子も果物などあり●。また美代子のことも思い出し、送れるものならばと？

時下、ますます暑さのおり、母上様にはいっそうおん身ご自愛のほど越子や美代子にもよろしく。では次まで。

不一

手紙：中支の吉田喜代次さんより 母 信さんあて

（年月日不明）

母上様

その後はご機嫌いかがですか。

当地はたいへんに都合よく三日照り、のち一日くもり、次は雨で、まことに万物にはしのぎよいことです。次期作戦準備で士気をやしなっておりますから、まずはご安心ください。

ここに写真をお送りいたしますが、これは過日〇〇山攻撃のとき、〇〇山に連隊長殿の護衛に行って食事のときに連隊長殿がカメラにて写していただいた品を昨日私らにくださって、まことに光栄のいたりであります。たいへん立派な記念品です。大切にして私の帰るまで残しておいてください。お願いいたします。

万事はそのうちにわかることと思いますが、あまり無理をしないでください。私は実際片腹どころか、両腹がうずいて●なります。

となり近所の人々には、無事つとめているからといってまず安心をしていただいてください。●い伯母様も元気と察しますが、歳が歳であるゆえ無理のなきよういってください。

また、いろいろと面白いこともあるが、それは次にして、まず本日はこれにて失礼いたします。

三月三十日　　陣中にて

喜代次

母上様

「出陣にあたり、一筆書きおきます」

久保田仁佐久さん（京都市出身）

◇明治45年(1912)生まれ

◇昭和8年、美津子さんと結婚。

◇18年6月、召集を受け、一男(敏郎さん)一女(和子さん)と美津子さんのお腹の子供をおいて入営。

◇仁佐久さんはブーゲンビル島へ出征、家族は滋賀に疎開。

◇20年3月、戦病帰国し、陸軍病院へ入院。美津子さんが見舞った日に戦病死。

体格の良かった仁佐久さんは、日中戦争が始まると、近所の手前もあって召集を期待していました。その仁佐久さんは病気で帰国され、美津子さんが会ったときには、まるで別人のように衰弱しておられたそうです。

翻刻した手紙は、入営前に家族へ残した遺書。一人ひとりに言葉をかけています。

手紙：出征前の久保田仁佐久さんより 息子 敏郎さんあて

（昭和十八年七月四日）

遺書

昭和十八年七月初旬、父は日本軍人の名誉たる南海の一独島に出陣するにあたり書をのこすなり。

一．父の戦死を名誉として母のおしえをよく守り母に孝養をつくすべし。親に心配をかけるは大なる不孝なり。

二、先ず忠孝をつくさんには体力なり。体力なくしていかに忠孝なしがたし。よく体力の錬成につとむべし。

三、学修は母一ツの平●てなか、大学を修むるは至難なれども、苦学するとも上級学を修むるよう心がけ政府の学費補助法も有するなればよくよく勉学せられたし。

四、およびて人たる者は禅の道に入り、禅を習得すべし。人生えること、まことに大なり。

五、人はお国の活力いかんによって定まるもお国の軍人たる志望を望む。

右の条よくよく守り、仮にも世人の悪評を受くるなきよう留意し、久保田の家名のますます繁栄なるを望むも、一にお国の両肩に●●、おのおの無道に城をもって精励あらんことを父の門出に万歳をもって遺書す。

昭和十八年七月四日

敏郎へ

手紙：出征前の久保田仁佐久さん より 妻 美津子さん・
娘 和子さんあて　　（昭和十八年七月四日）

出陣にあたり一筆書きおきます。この手跡がお前の手に届くようなれば。戦死たるにつき、必ず悲むようなく喜んでください。今までに良人としてお前に満足も与えず。それにもかかわらず良くつくしてくれたこと、厚く感謝いたします。

収入の道もなく困難することなれども、よろしく打開の道を立て、なにとぞともに子供の教育をお願いします。次に遠境の母のことも、なにとぞ年老いたる母にて、何かと面倒がかることなれどよろしく孝養をつくしてください。

和子も女子は女らしく母に孝養さし、女は家庭を持つが第一要旨にて立派な主婦をしてその道に精進してください。

昭和十八年七月四日

出陣に当りて

美津子　和子　へ

「中国に九年在留した看護婦さん」

西浦一ゑさん（甲賀市［旧信楽町］出身）

◇明治41年(1908年)生まれ

◇昭和3年、大津赤十字救護者看護婦養成所卒業。

◇昭和7年、9年、15年、19年の4回召集を受け、従軍看護婦として中国へ出征。

◇2度目と3度目の間、昭和10年に武夫さんと結婚。

◇終戦後も八路軍に留用され、漢口の医療施設に勤務。

◇28年8月に帰国。

西浦一ゑさんは従軍看護婦として、中国へ4度出征され、戦後長く中国に留用されたあと、元気に日本へ帰ってこられました。終戦のあと、ようやく送ることのできた姉と夫あての手紙には、離れていた家族に対するこまやかな心づかいがうかがえます。出征先から女性が書き送った手紙として、紹介します。

手紙：中国の西浦一ゑさんより 姉あて

（昭和二十五年十月十五日）

前略

音信不通になって五年間、どんなに長い間であったことでしょう。何の家の整理もせずに来てしまって、あとはみなさまの何かとお世話になっていることでしょう。みなさまにもずいぶんと変化があったことでしょう。お元気でございますか。信一や涼子はもう子供の親になっていることでせう。親類間も変ったことでしょう。

大津の堀池様や京都の辰夫叔父が、私が出発して以来、死亡されたお便りは拝見いたしました。京都の母上も元気でしょうか。信男様も無事に帰郷なされていることでしょう。主人も台湾から一度便りをいただいたことなのですが、無事に帰郷されていることと思います。その後の様子をお知せ下さい。もし結婚されていても、私は当然なことに思いますから、事実をお知せ下さい。私はおかげさまで元気にしています。

五年間大病もせずに、大津を出発した時に一緒だった若い看護婦の人たちと一緒に、今も不自由を感ずることなく毎日を朗らかに送っています。年をとりました。頭に白毛があるのが年を取ったことを物語っています。自分は日本を出て来た時から少しも変ったことがないような気がしますが、やはり年を取ったなあと思って、死んだ母親を思い出しています。

今私たちのいるところは、夏はとても暑くて有名な場所です。よく私たちが日本にいる時聞いた、電信柱のすずめが暑さのために焼け死ぬと、それがこの漢口なのです。しかし、その暑さも何のことなく過ごしました。今は日本の十一月ごろの気候です。菊の花もあれば、コスモス、ケイトウ、ダリア、カンナの花が病院の庭一面に咲き乱れて美しいです。食べ物にしても柿、栗、ミカン、バナナ、リンゴ、といったものがあって、日本の生活と少しも変りません。

もう中国の言葉も上手になって中国人と話すのに不自由を感じなくなりました。私は今小児科の医者として、毎日の勤務を忙しく送っています。

今の中国は素晴らしい発展ぶりです。私達のいる軍隊の中も日に日に整理されて、新しい医療器械、薬物など過去の日本軍隊内でも見なかったものが多いです。それで若い人たちの中に入って、毎日その勉強です。一日五時間の勤務で、政治方面の勉強が二時間、医務方面の勉強が二時間、あとは自由時間です。このごろは運動がさかんで、男子は野球、女子はバスケットなど、体力の増進につとめています。そうして一ヶ月に一回は全漢中の日本人が集まって、いろいろ運動の競技があったりして楽しんでいます。

さる十月一日の新中国国慶節の祝い日は、とても賑ったものです。あんなたくさんの人が集まった会合は見たことがないくらいです。革命が成功すればこんなものかと。日本も早くこんなにならないかと、つくづく思いました。

日本国内の様子は新聞で知ることができます。何かに困難、生活に就職についてもこのころ私たちと一緒に来ていた人で、先に日本に帰った人たちからお便りをいただきました。昨年十月ごろに中国から帰った人で、最近日本の生活が困難だか

ら、もう一度中国に行きたいなんていって来ました。これがほんとうのことでしょう。

昭和二十一年に帰国された瀬田の友達にいろいろとことづけをしておきましたが、聞いて下さいましたでしょうか。その人の住所と、京都の利一郎叔父、高井三治郎様の住所をお知らせ下さい。私たちも近いうちに帰国できると思います。それまで姉上様も元気で待っていて下さい。

出来うれば家内中の写真があれば送って下さい。私のことは何も心配なく元気ですから、家の方も何かにご迷惑でしょうがよろしくお願いいたします。柞原の叔母のところへも無事であることを知らして下さい。この写真は最近軍の方で入用で、こんな小さいのを写しました。またあとで、きちんと写して送ります。

お便りお待ちしています。

みなさまおん身大切に。

一九五〇年十月十五日　　西浦一恵

手紙：中国の西浦一ゑさんより 夫 武夫さんあて

（昭和二十八年二月八日）

武夫様

一月二十四日付のお便りうれしく拝見いたしました。

あなたと別れて九年間、お互に幸福を念じつつ毎日を過して来ました。今こうして通信が出来るようになって、元気であったことを知り合うことはなんと幸福なことでしょう。

●でこそ九年間ですが、永い間あなたには自由な生活を送っていただいて、あなたならこそと感謝の気持で私は一杯です。亡き両親もどんなに満足していることでしょう。

母上が元気であったことも私を喜ばせました。元来が元気であった母上ですからとは思いつつも、年が年ですから七十六才になられたよし、ほんとうにご苦労様です。京都の兄上様夫婦もお元気のよし。やはり健康でありさえすれば、再会はできるものと、今までの九年間が夢のように感じます。私も年を取ったようですが、自分では日本を出て来る時と少しも変らないように思っていますが、鏡を見たり白毛を見るたびに、年は年だと思います。しかし元気ですから、ご安心下さい。今私のいるところは、日本の気候とあまり変りません。生活も中国式にすっかり慣れました。毎日を何不自由のない日を送っております。医者の仕事をしています。患者さんからは日本のおばさんといって慕われています。

今中国は素晴らしい発展ぶりです。日本国内の状態は新聞で詳しく知ることができます。帰国問題も着々と進められている様子です。中国にいる者も準備を進めています。しかし私は仕事の都合で少し遅れるかも知れませんから、どうかそのつもりでいて下さい。あなたも何かと不自由でございましょうが、今少しご辛抱下さい。

私が九年間中国にあって、どのような仕事をしてきたかは解っていただかれると思います。もう長くはないと思います。私が帰国したら、きっとあなたにも喜んでいただける人間となっています。

母上にもほんとうに気の毒ですが、よろしくお願いして下さい。ご老体にもかかわらず、何かとあなたのご面倒を見ていただいて、まことに申し訳ありません。今後は通信ができることですから、私も書きます。

親類一同には次々と書きますが、あなたからよろしくお伝え下さい。今日滝夫様から一週間前は信一殿から、それぞれお便りをいただきました。

どうかあなたもお体に充分気をつけられてお勤め下さい。何といっても健康です。健康であれば、お互に幸福な生活が送られるのです。あなたも元来が健康ですから、私の期待はただ健康であってほしいです。私も充分に気をつけて病気にかからないようにします。

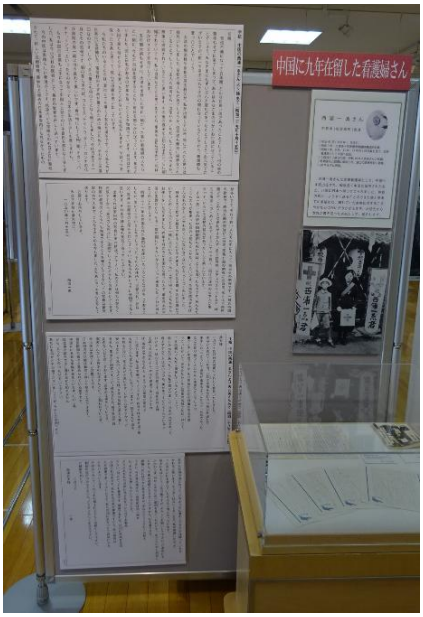
今日はこれにて、くれぐれも母上によろしくお願いして下さい。

勅旨の近所のみなさまにも、どうぞよろしくお伝え下さい。

ご健康を祈りて

二月八日

西浦武夫様



西浦一ゑさん関係資料　手紙、写真

西浦一忍さん　本人提供

第３章　母へ

「異国へ来てだれもが望むのは、
故郷からのたよりです」

Ｆさん（蒲生郡日野町出身）

◇大正８年(1919 年)生まれ

◇父が早くなくなり、兄弟は妹 2 人だったので、Ｆさんは家にとってただ一人の男子だった。

◇Ｆさんは郵便局に勤務。2 度出征したが、1 度目は本隊付き衛生兵で、戦闘には不参加。

◇2 度目は近所の見送りなく出征。

◇昭和 19 年５月、フィリピン･レイテ島で戦死。

家でただ一人の男子だったＦさんは、母に多くの手紙を書き送っています。手紙によると、Ｆさんはフィリピン攻略の緒戦から現地におられ、米軍の反撃まではおだやかにすごしておられたようです。

戦死公報を受け取った母は、「寺に入りたい」ともらされたそうです。

手紙：フィリピンのＦさんより 母あて

（昭和？年七月二十五日）

おたよりありがくいただきました（妹六. 八 母上六. 二三出七月二十一日受取）

暑さいよいよ厳しきおりがら、母上はじめ妹にはおかわりなくおすごしのようすなにより喜ばしく存じます。緒私もおかげさまでその後至極元気旺盛でご奉公いたしおりますから、なにとぞご安心ください。

常夏の当地も雨期に入ってから、連日雨に見舞れて、内地の梅雨のようです。私の現在いるところは、比島でも絶景の高原地ですが、このごろは霧や雲につつまれて、ちょっとさきも見えなくなる時もたびたびあり、そのすずしさはまた格別です。

母上様もご承知のとおり、比島も砲煙おさまりて、ここに幾月か治安はまったく回復され、住民も日の丸とともに新生の意気に燃え立っております。私もあのバターンの激戦の疲労もすっかり忘れて、今戦友とともに思い出を語り、ほがらかな日をすごしております。

陣中のいとまに、上陸以来進撃のあとを戦場の記念として、また過去の思い出としてつづっておりますから、家の方に一月以来マニラ攻略、バターン作戦、コレヒドール攻略の新聞記事はせいぜい保存しておいてください。

故郷からのたよりは、日に二回ほどまいります。今日までに合計九十一通いただきました。異国へ来てだれもが望むのは、故郷からのたよりで、受け取った時のうれしさは口や筆ではいいつくせません。

おたずねのお守様や写真は受け取りました。熊野の姉や兄上からもその後いただきました。部隊長殿の挨拶状も着いたようですが、そのお礼や格別お世話になっておりますから、もはや熊野の兄上か局の●●氏におねがいしてお出しください。また、副官殿（西口少尉）にもお世話になっておりますから、一緒にお出しください。

私の写真は六月八日に出しましたから、入れ違いに着いていることでしょう。慰問袋はまだ取扱いはないそうですが、物資豊富の国ですから、なにも不自由しておりませんから、決してご心配くださらないでください。

故郷も炭鉱の拡張でたいへんにぎやかになったそうですね。村の発展をはるかによろこんでおります。このたよりが内地にとどくころは、もうお盆ですね。私もはるか陣中より先祖の霊に感謝をささげます。

暑さ厳しきおり、十二分におん身大切にご自愛くださるよう祈りあげます。

今日はこれにて、また次便で

七月二十五日

F

母上様

手紙：フィリピンのＦさんより 母あて

（昭和？年三月二十七日）

母上様　いつもおかわりなくご壮健でなによりもうれしく存じます。二月二十二日出のおたよりも、さる十八日にいただきました。今年の冬は非常な寒さにもかかわらず、日々供出にみなさまとご一緒におはげみくだされたようすをうけたまわり、ご苦労のほどをおしのびいたしております。

いつの間にかお彼岸もすんで、もう内地ではうららかな春の日がおとずれてまいりましたことでしょう。当地は連日内地の真夏のような暑さがつづいて、水銀柱は九十度をこえております。しかしそれでも夜になると、涼風が吹き、あたりに虫の鳴く音が聞こえてちょうど内地の秋のような気がいたします。小生もおかげさまでその後ますます元気旺盛でご奉公いたしておりますから、なにとぞご安心ください。

過日、●●様から引伸しの写真いただきました。トカゲをさげているのは大失敗で、みなさまお笑いになったことでしょう。今日はアカシヤの樹陰で、略衣（半ズボン、半袖ジバン）を着て、元気な顔を戦友となかよくほがらかな顔をお送りいたします。今までのと一緒にご保存おきください。

過日、妹よりの手紙（三月四日出）で■■の病気をうけたまわりたいへん驚きました。みなさまもさぞかしご心配になったこと、お察しいたしておりますが、その後の容態いかほどですか、おうかがい申しあげます。

その後、戦場には別にかわったおたよりもございません。

今日はただ消息お知らせまで。

春の季節とはいえ、母上様十分おん身大切にご自愛くださいませ。

三月二十七日

F

母上様

手紙：フィリピンのＦさんより 母あて

（昭和十八年一月十二日）

今日十二月十二日出のおたより、うれしく拝見いたしました。もう故郷の山々は白銀と化しているとのよし。寒さいよいよ厳しきおりがら、母上様にはその後ますますご壮健にておくらしとのよし、なにより喜ばしく、お正月もご機嫌よく迎えられたこととお祝い申しあげます。小生もおかげさまでますます元気旺盛で、ここに戦勝二度目の正月を迎えて新機一転し、ご奉公にはげんでおりますから、なにとぞご安心ください。

当地は今なお内地の六月ごろの気候で、十一月以来、まだ一度も雨さえ降りません。

お正月も内地に比べていろいろかわった珍風景で一一、暮れには部隊長殿をはじめ、われわれ兵隊の米で餅をつき、椰子の葉あおあお門松を立て、七五三もかざり、大晦日には遠く故国より除夜の鐘が鳴りひびいて来るような気がいたしました。

元旦には早朝全員が皇居を遥拝し、陛下の万歳をとなえ部隊長殿の訓示に決意を新たにたがいにご奉公とお誓いして、意義深い新年をお祝いしました。

三賀日は雑煮に野戦料理をいただき、戦友達と宴会などももよおし、故郷をしのびつつ、楽しく正月の気分を十分に味わいました。母上様にはさぞお一人で何かとおいそがしいことであったこととお察し申しあげます。

熊野の兄上様のおたよりで、▲▲君の徴用を聞き驚きました。△△様はじめ親戚もお米不足でおこまりのことでしょう。しかし、これもみな皇国のおんためです。木材割木などの供出もおいそがしいようで、なにかと銃後の方々が戦場の小生達以上に緊張したご活動がしのばれて感謝のほかありません。

いつか大阪の兄上様のご依頼した写真、できあがったよし。小生のもとへ各一枚づつお送り下さいませ（残りはそのまま残しておいて下さい）□□君もご不幸にして病気で内地にご帰還とのこと。病院名をお知らせ下さい。●様や■様にまだお見舞状も出さず、ご無沙汰いたしております。母上様からよろしく申し伝えください。

もう字の役員もおかわりになったことでしょう。新役員の方々をお知らせください。寒さいよいよ厳しきおりがら、おん身くれぐれも大切に、はるかご健康を祈りつつ今日はこれで失礼します。

同封写真は一月元旦遥拝式後、副官殿主計殿とともにうつしたものです。ご保存おきください。

十二月一日出のたよりもいただきました。

一月十二日夜

F

母上様

手紙：フィリピンのＦさんより 母あて（昭和十九年一月七日）

帰還される■君にたくし、一筆申しあげます。

母上様にはいよいよご機嫌よく新年を迎えられたこととはるかにお祝い申しあげます。いつも心にかかりつつ、多忙におわれ、ご無沙汰がちになり、ご心配をかけて申訳けありません。
小生おかげさまで元気旺盛で比島に三度目のお正月を迎え、おぞうにやお神酒もいただきました。比島で三度も正月を迎え、すべてのものになれきって、落ち着いたものです。
応召以前からやせている僕には珍しいくらい頑健で、一日として病気したことはなく、思ふ存分ご奉公にはげんでおります。これもひとえに母上様が日夜神かけてご祈願くださるたまものと、神仏のご加護を喜んでおります。
いつも内地からのラジオや新聞で、銃後のなみなみならぬお骨折りをしのんで、ご苦労に感謝しております。
小生の現在地は一昨年（十七年）十月から同じ地で、兵舎の設備もよく、また比島でもすずしい土地です。小生もとうとう部隊の古たぬきになり、初年兵たちの教育やすべての任務が重なって、なかなか多忙です。とくに部隊本部の人事・功績・編成と毎日の仕事がいそがしく、たよりもついご無沙汰になるのです。
ひまあれば野菜畑の手入や運動をやり、とてもほがらかな毎日をすごしておりますから、決して決して心配なきようねがいます。
日曜には時おりビール、お菓子など、加給品もあがり、なにも不自由なくかえって内地の母上様たちをしのぶと、もったいないような気がいたします。
当地は物価がずいぶんあがりました。今ちょうど玉子一個が五、六十銭、鶏一羽が十五円、米が約二升が五、六円、石ケン一個（洗濯用）四、五円もするのです。
色々お知らせしたいことはたくさんありますが、最今■君らといっしょの兵隊があるので、小生の仕事はとくにいそがしく、この●●読便にも時間がなくまた次にお知らせします。
母上様お一人でいろいろお骨折りですが、決してご無理せられぬようおん身十分大切にしてください。小生のことはくれぐれもご心配なきよう

一月七日　　F

「お母さまも無理をしないよう、できないことは親類にたのんでね」

村上順治さん（守山市出身）

◇大正11年(1922年)生まれ
◇順治さんには両親(喜左衛門・まさ)と姉(初枝)がおり、父は病気で寝たきりで、母が田仕事と看病をこなした。
◇昭和18年2月、現役で岐阜の部隊に入隊。
◇同年3月、中支に派遣。
◇同年11月ビルマに派遣。
◇19年8月、ビルマにて戦死。通知のあった21年に父死去、翌年母死去。

父と母を気づかうハガキは、中国から何通も届きましたが、ビルマからは2通しか届きませんでした。
順三さんの戦死通知からまもなくお父さんが亡くなり、翌年遺骨が帰郷してまもなくお母さんが亡くなったので、姉の初枝さんは一人で3人のお葬式を出しました。

ハガキ：中支の村上順治さんより 父 喜左衛門さんあて

（昭和十八年春）

拝啓　時下春暖の候とあいなりました。その後は意外のご無沙汰をいたしております。父母様おかわりはございませんか、おうかがい申しあげます。くだりて小生もおかげさまにて日夜軍務に精励いたしおりますゆえ、他事ながらご休心ください。日々と暖かになりましたね。もうひがんですもの。営門の一本の梅も咲きました。
大陸の野も青々と一方千里麦畑がどこまでもつづいております。支那人が重そうに一輪車を持って物を運んでいます。
お母様も無理をしないようにください。お父様も時々お医者様に見てもらって気長に養生ください。できないことは親類の方にたのんでね、してもらってくださいよ。今日はこれにて失礼いたします。

草々

ハガキ：中支の村上順治さんより 父 喜左衛門さんあて

（昭和十八年秋）

拝啓　天高く馬こゆるの時期となりましたね。
その後はご無沙汰いたしおります。お父様お母様おかわりはございませんか、おうかがい申しあげます。くだりて小生もその後は意外に元気にて軍務にはげみおりますゆえ、お父様お母様、ご安心くださいませ。今後おおいにがんばってやります。
大陸もだいぶん住みよくなり、よい時候とあいなりました。親類の方々もご壮健ですかね。できぬことは分家の●様や助様の叔母様方におたのみくださいよ。自分もいつもたのんでおります。無理をなさいますなおねがいします。時候がら充分におん身大切にください。　　敬具

ハガキ：中支の村上順治さんより 父 喜左衛門さんあて

（昭和十八年十一月十五日）

拝啓　時下晩秋の候にございます。

その後は意外のご無沙汰をいたしおります。お父上様お母上様おかわりはございませんか、おうかがい申しあげます。くだりて小生おかげさまにて軍務にはげんでおりますゆえ、他事ながらご休心下さい。中支も毎日晴天がつづきます。

内地も日々忙しいことと察します。小生も富三郎君と同様にて行きますゆえ、また男子の本懐をいかんなく発揮する時季が来ましたことをなにより喜んでおります。ご両親様もご心配はご無用ですからご通●ください。今後はあまりたよりも出せませぬし、またここにはおりませんゆえ、今後のおたよりはここから出すまでは、出していただかぬようくれぐれもご承知ねがい申しあげます。

今後は充分に奮闘いたし、銃後のみなさまがたのご期待にそうべく努力いたします。ご両親様も無理をいたされぬように、お楽をとくにおねがい申しあげます。

寒さへむかうおりがら、充分におん身ご自愛ください。大陸の一角よりお祈り申しあげます。今日はこれにて失礼いたします　　敬具

十一月十五日

ハガキ：ビルマの村上順治さんより 父 喜左衛門さんあて

（年月不明）

拝啓　その後はご無沙汰いたしおります。

お父母上様おかわりはございませんか、おうかがい申しあげます。

くだりて小生もおかげさまにて軍務に精励いたしおりますゆえ、他事ながらご休心ください。ここは毎日のように暑いですね。しかし朝夕はすずしいですよ。熱帯の地ではありますが、内地とかわったことはあまりありません。住民の家は簡素なもので椰子の葉などで屋根が作ってあります。山中へ入ると虎やヒョウ、象がたくさんけだものがいるようですが、このへんでは見られませんね。象は住民がかつて運搬等に使っておりますが、それも山の付近ですね。お父様の病気はいかがですか。気長に養生ください。時候がら充分におん身ご自愛ください。今日はこれにて失礼いたします。　　草々

（返信先）ビルマ派遣軍祭七三七一部隊石毛隊

村上順治

ＵＳさん（左上３枚）・村上順治さん（それ以外）からのハガキ

「母上様の身上を心配いたしております」

ＵＳさん（京都市出身）

◇大正 10 年（1921 年）？生まれ

◇両親と三兄弟姉妹の家族。

◇長男は出生したまもなく病気で除隊。

◇ＵＳは昭和 16 年に徴兵検査を受け病気で猶予をえたが、翌年召集をうけ出征。

◇18 年 8 月、父が死去。

◇20 年 5 月、湖南省にて戦死。

ＵＳさんは両親と姉の子を気づかったあと、「戦争には行きたくないけど、行かんかったら憲兵がきよるで。そしたらみなに迷惑かける」といって出て行かれました。

お母さんは「ＵＳの靴音がする」といって、夜中に起きてこられたことが何度もあったそうです。

ハガキ：中国のＵＳさんより 母あて（昭和十八年六月十八日）

前略　ごめんください。

長らくご無沙汰いたしております。先日の母上様のおたよりありがとうございました。

みなさまの元気であることを知りよろこんでおります。くだって自分も元気で毎日軍務にはげんでいます。

また、母上様には毎日商売にいそがしいことと思います。

母上様のなにかのたしになるかと思いまして、小金を送りました。受け取りください。

自分のことはなにも心配しないでください。

みなさまの健康をお祈りしております。またのたより。

さようなら

ハガキ：中国のＵＳさんより 母あて（昭和十九年三月三十日）

前略　ごめんください

長らくご無沙汰いたしております。お手紙ありがとうござい

ました。父上様が長らくご病気中のところ、一生懸命に母上様またみなさま十二分ご介抱のかいだになき、急遽のお別れとなり、自分も驚き、手紙をランプの元で読・・・・・。
母上様また兄上様、ご苦労をかけ、まことにすみませんでした。母上様、毎日四時半に起られて商売されているときき、母上様の身上を心配いたしておりますゆえ、このうえはおん身大切に。まずお悔やみまで。

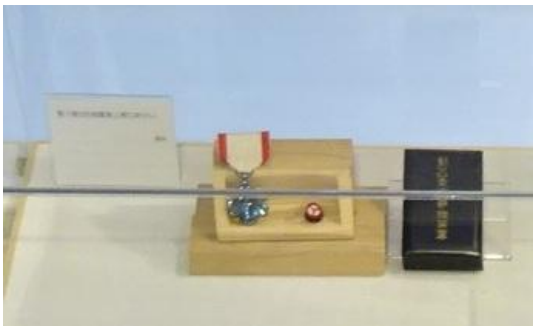
三月三十日　　さようなら

ハガキ：中国のＵＳさんより 母あて　　（年月日不明）

前略　ごめんください
長らくご無沙汰いたしております。小兵も元気で毎日毎日軍務に邁進いたしておりますゆえ、他事ながらご休心ください。家内のことは十月のお手紙できいて、母上様のご苦労をおさっしいたします。また、兄上様もご同様のことと思います。父上様のことおねがいいたします。このごろのことをお聞かせください。
自分は十二月一日付に上等兵になりました。自分もますます軍務に邁進いたします。▲▲様は元気でおられます。隣組のみなさまによろしくおつたえください。
●●、■■様によろしく。
父上様のことをおたよりください。またのたよりで。

さようなら

バナー写真：左　ＵＳさん　個人提供
右　高橋亮一さん　高橋正さん提供
高橋亮一さん関係資料　文机、筆立て、水彩画など



ＵＳさん関係資料　勲八等白色桐葉章

「マンジュウやヨウカンを、持って来て下さい」

高橋亮一さん（長浜市[旧浅井町]出身）

◇大正 11 年(1922 年)生まれ
◇父は亮一さんが生まれる前に死去。母政栄さんと母子の生活だった。
◇虎姫中学校在学中に予科練を志望し、13 年 4 月入学。
◇予科練卒業後、鈴鹿・宇佐海軍航空隊で飛行訓練を受け、佐伯航空隊に所属。日中戦争にも参加。
◇真珠湾攻撃に参加。被弾したため体当たりを敢行。

母一人子一人だったので、横須賀の予科練のころから頻繁に近況を知らせています。食べ物や面会の要求をしていた亮一さんも、鈴鹿空で本格的飛行訓練に入ると極端に手紙が減り、一人前の操縦士となるころには、内容がまったく変ります。真珠湾で自爆した亮一さんは、終戦まで軍神とあがめられました。

手紙：横須賀予科練の高橋亮一さんより 母 政栄さんあて

（昭和十三年四月三日）

拝啓　このごろはたいへん暖かくなって来ました。こちらではさくらの花も今ちょうど満開です。今日は神武天皇祭であったので、式が八時四十五分からありました。昼は赤飯でした。一日の昼も赤飯でした。式が終わってから昼まで飛行機の格納庫へ入って、説明を中佐殿から聞きました。
昼飯後、小西のお父さんに面会所で小西と二人が会いました。〔虎姫中〕学校の方へ寄付金を二十円するように決めましたから、どうぞよろしく。また、同窓会の入会金十円の残り四円は通帳を、家へかえられる時に差引いて、残った四十四円くらいを渡されることでしょう。二十円どうぞよろしく。
入隊式は五日です。水口の叔父さんはまだおかわりになりませんが、もしおかわりになりましたら、お知らせ下さい。洋服や靴、股引などを荷造りしましたから、近いうちに送ることと

なるでしょう。参考書も読む時間がないから送らないで下さい。育子に間にあうものがありましたら、与えて下さい。
今日は午後はなにも用事がありません。六日から授業が始まります。金や時計はみな班長殿に預けておきます。
必要なものはみな班長に買って来てもらいます。今日も小西と二人で新しい軍服で写真を撮りました。どうぞよろしくおつたえください。これからは書くひまがありません。悪しからず。手紙もください。むこうのようすもくわしく知らしてください。
おん身お大事にしてください。　　敬具
四月三日
横須賀海軍航空隊
甲種飛行予科練習生
第四十二分隊第二班
高橋亮一
母上様

手紙：横須賀予科練の高橋亮一さんより 母 政栄さんあて
（昭和十三年五月二十七日）

母上様　おかわりなくおくらしのおんよし、なによりです。私も元気で軍務に精励しておりますから、ご安心下さい。
今日は海軍記念日で、朝遥拝式があり、講話後九時五分から第二期生を八組に分けて、一里あまりのところの神武寺という寺の山門までマラソン競走。そして昼食をすませ、マンジュウや夏蜜柑を食べてから、山に登って寺の本堂へ参り、鷹取山に登り、追浜公園で遊び、隊へかえりました。無事ですからご安心ください。
面会に来てくださるのを待っております。六月十八日は土曜ですから、午後はいろいろのことが（掃除や体操）ありますが、面会はみなゆるされていますから、午後来てください。大船で乗りかえて田浦でおりて来てください。
バスもありますが、歩いても遠くはありません。マンジュウやヨウカンやバナナを持って来てください。小西（四三分隊の二班）も親せきだといって、番兵にいって面会をしてください。
門を入って左に番所があり、そこでいって面会所へ行くのです。小西のお父さんも近いうちに来られるのです。外出ができるころはたいへん暑いから、また秋の暮にでも来て、そこらをご案内いたしましょう。
お身を大事にして下さい。　　亮一
母上様へ

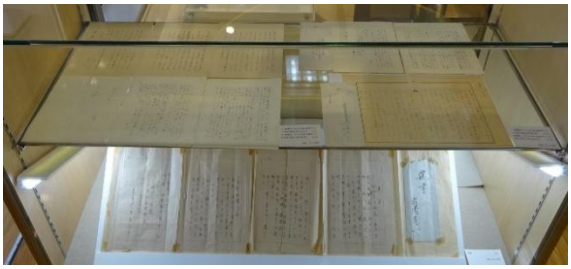
手紙：鈴鹿海軍航空隊の高橋亮一さんより 母 政栄さんあて
（昭和十五年一月三十一日）

拝啓　おたよりただ今拝見いたしました。おかわりなくおくらしのよし、なによりと存じます。私いたって元気で毎日飛行しておりますからご安心ください。
おたよりによりますと、例年はまれな大雪とのこと。さぞご不自由なこととお察し申します。なにとぞおん身を大切にしてください。当地は今が一番寒いそうですが、雪が積ることはありません。しかし毎日昼ごろ、一時的にチラチラと降るだけです。鈴下おろしのからっ風はたいへん冷とう、また痛うございます。こちらでも四日市以北は真白です。昼になっても小さい川は氷っています。
四日市駅にはいつも屋根に白雪を乗せた列車が一列車か二列車は入っています。毎日の地上気温は零下一度か二度で、たまに一度の時があります。一千米あがれば、地上０度の時でも零下七度。射撃最後の日、地上零下二度、一五〇〇米の上空で編隊空中戦闘を行いましたが、上では零下十二度で冷たいなどとは感ぜず、ただ銃を握っているのも目で見てはじめてわかるくらいでした。今は通信で六百の高度で飛行します。二月になれば次第に暖くなるようで、もはや一月も今日で終わります。卒業まであますところ二ヶ月になりました。もう十二日飛行すれば飛行作業も終わります。五十四回のうち四十二回終わったのです。飛行作業中も寒稽古がありましたが、風邪一つひかず元気ですからご安心ください。
寒さ厳しきおりから、おん身お大切に。ご健康をお祈り申します。　　早々
一月三十一日
亮一
母上様へ

手紙：佐伯海軍航空隊の高橋亮一さんより 母 政栄さんあて
（昭和十五年九月十日）

おたより昨日拝見いたしました。ご機嫌よくおくらしのよし、なによりに存じます。私もおかげさまで元気で軍務にはげんでおりますからご安心ください。
少しのあいだ、天気がつづいて喜んでおりましたが、昨夜からまた雨が降り出し、今日は、いま荒天準備をして、格納庫からかえったところです。二百二十日で案じております。風もそうとう強くなって来ました。
一昨日の日曜に下宿へ行きましたら、大津から刀とマフラー（首巻）とを送ってくださいました。お礼状を出しておいてく

ださい。日本刀の役に立つ日を楽しく待っております。
面会に来てくださるようですが、たいへん遠いところのことですから、来てくださらなくてもよいのですが。近いうちに写真が来ますから、でき次第、お送り申します。
今度の転勤までに、ある事情で名古屋に出張することと思いますから、その時はすぐお知らせします。まだこの日付はわかりませんが。
定行の少年航空兵志願はどのくらい進んでおりますか。すぐお返事ください。本当に真剣ならば、参考書を送ります。横須賀から本日来て下宿にあります。また、もっとほかにその方面に志す人はありませんか。
天候不順のおりから、母上様のご健勝をお祈り申します。乱筆ながらお返事まで。　　早々
　九月一〇日夜
　　亮一



高橋亮一さん関係資料　手紙、遺書

高橋亮一さん（4 枚とも）　高橋 正さん提供

第 4 章　故郷のたより　帰郷のいのり

故郷のたより　帰郷のいのり

戦地の将兵が故郷の家族へ便りを送る一方、家族も戦地の息子・夫・父に便りを送りました。家族から届いた手紙は、異国の戦地にいる将兵たちにとって、なによりの慰めでした。兵士は大量の荷物を持って移動しますが、Ｇさんは便りをつづって、帰国するまで持ち続けました。

郷里に残された家族は、息子・夫・父たちの無事をただ祈るしかありません。大津市伊香立の還来神社はその名まえによって、戦地からの生還にご利益があると信じられ、戦中は多くの人々が参拝して切実な祈りをささげました。また出征者には、家族らが手分けして集めた各地のお守りを持たせ、無事を願いました。

Ｋさん・ＫＨさん関係資料

【兄の戦死】　　Ｋさん

兄は昭和9年に一度現役で満州に行ってます。昭和13年、25歳で召集がありまして、2〜3日あとに出征して、安土駅で盛大な見送りをしてもらいました。

中国では宣撫班に属していて、昭和15年の秋に内地への遺骨護送の任務で帰って来まして。2週間ほどのあいだに、昼間は毎日タクシーで戦死者の家を訪問、戦死当時の話をしたり遺品を渡したり、さらに戦友の家へのことづけに走ったりで、忙しくしてました。

遺骨護送の仕事をすると、100日以内に戦死するというジンクスがあったそうで、まさにそのジンクスのとおり、兄は15年12月9日に西康省（現在の四川省の一部）で戦死しました。

そのころ私は夢を見まして、兄の右のこめかみから血がドクドクと吹き出してるんです。翌朝、安土局から電話がかかってきましてな、「兄さんの戦死の知らせと違うか」と叫んだんですが、そのとおりやったんです。

展示品はＫさん（旧安土町）と、ＫＨさん（旧近江町）が所持していたお守。

Ｋさん関係資料　お守り袋・お守り

ＫＨさん関係資料　お守り袋・お守り

【還来[もどろき]神社】　　Ａさんたち

当時の祈願はあくまで「武運長久」です。

日曜日の参拝者がとくに多かってね。江若鉄道和迩駅に列車が到着するたび、出征兵士の家族たちが一里あまりの道を歩いてぞろぞろやってくるのです。

一人の神主ではあかんので、日曜日には2人も3人も神主が応援にきてました。私らもそのときに臨時の受付をたのまれました。多いときは拝殿に入りきれんで、参拝者が取り巻いてました。順番待ちの女性が、お百度参りもしてはって、竹串をもって本殿の周囲をまわってはりました。

寄進された鈴の数はすごかったですわ。摂社の鈴縄にはもちろん、本殿の框や社務所の軒先にまでたくさんつるしてあった。けど、金属回収ですべて供出されてしまいましてな。本殿に鈴が一つ残ってるだけです。

当時は富裕なもんで、在所の割り当ての国債も、高額なもんはぜんぶ還来さんが引き受けてくれはった。けど、敗戦でただの紙切れになってしもて、貧乏にならはった。それからは、還来さんを省みる人はいなくなりましたな。

還来神社（上下とも）　当館撮影

【「故郷の便り集」】　　Ｇさん（匿名）

私は、22 歳の時に結婚しました。妻は 19 歳でした。昭和 14 年に召集を受け中国に渡ったとき、妻は妊娠 5 ヵ月でした。

私の任務は、大隊長付きとして大隊長の馬の世話です。軍隊での楽しみは、故郷からの手紙を読むことと、故郷に手紙を書くことです。妻は、せっせと手紙を送ってくれました。作戦に出ている間は受け取ることができませんが、帰ってくると 10 通くらい届いているんです。私も作戦から帰ると妻や両親に手紙を書きました。

部隊は各地に移動します。私は受け取った手紙を段ボール箱に詰めて、大隊長の柳行李に入れさせてもらいました。大隊長が帰還されてからは、千人針にくるんで雑嚢に入れて持ってました。昭和 18 年 5 月、内地に帰還するときもこの「故郷の便り」は大切な宝物なので持って帰りました。

昭和 30 年、妻は 39 歳で亡くなったんですが、妻が使っていたタンスの引出しに、戦地から妻にあてた私の手紙が残してあるのを見つけまして。妻も私の手紙をこんなに大切にしてくれたのかと感無量でした。

Ｇさん関係資料　「故郷の便り集」

※令和 8 年 4 月編集

第21回企画展示「戦場より故郷の家族へ一戦没者の手紙一」（会期：平成30年9月30日～12月24日）展示資料一覧

No.	資料名	点数	資料説明	提供者名
プロローグ				
1	軍事郵便封筒		未使用	太田久ゑさん提供
2	軍事郵便絵ハガキ		未使用	坂下治男さん提供
第1章　父へ　家族へ				
3	手紙	一式	Sさん関係資料	個人提供
4	奉公袋	1	中川正雄さん関係資料	中川　貞(てい)さん提供
5	手紙・ハガキ	5	中川正雄さん関係資料	中川　貞(てい)さん提供
6	軍隊手帳	1	中川正雄さん関係資料	中川　貞(てい)さん提供
7	手紙・ハガキ	2	植田潔さん関係資料	植田安正さん提供
8	万年筆	1	安田新市さん関係資料	安田吉右衛門さん提供
9	手紙	1	安田新市さん関係資料	安田吉右衛門さん提供
10	手紙・ハガキ	4	Mさん関係資料	個人提供
11	手紙	5	Uさん関係資料	個人提供
12	手紙	一式	高橋克己さん関係資料	馬場きくさん提供
13	陸軍軍帽	1	青木勘四郎さん関係資料	青木喜代さん提供

14	水筒	1	青木勘四郎さん関係資料	青木喜代さん提供
15	日の丸鉢巻	1	青木勘四郎さん関係資料	青木喜代さん提供
16	手紙・ハガキ	6	青木勘四郎さん関係資料	青木喜代さん提供
17	写真	3	青木勘四郎さん関係資料	青木喜代さん提供
18	手帳	1	青木勘四郎さん関係資料	青木喜代さん提供
19	手紙・ハガキ	6	奥島宗男さん関係資料	奥島すみ子さん提供
20	手紙	1	奥島一重さん関係資料	奥島すみ子さん提供
21	自動車運転免許証	1	奥島宗男さん関係資料	奥島すみ子さん提供
22	絵ハガキ「斉斉哈爾名所」	一式	奥島宗男さん関係資料	奥島すみ子さん提供
第2章　妻へ　家族へ				
23	妻 八重子さんの嫁入りかんざし	1	西澤久一さん関係資料	西澤美重子さん提供
24	寄せ書き日の丸	1	管野定三さん関係資料	管野サトさん提供
25	奉公袋	1	管野定三さん関係資料	管野サトさん提供
26	お守り	1	管野定三さん関係資料	管野サトさん提供
27	貴重品袋	1	管野定三さん関係資料	管野サトさん提供
28	戦死通知書	1	管野定三さん関係資料	管野サトさん提供
29	財布	1	管野定三さん関係資料	管野サトさん提供
30	ハガキ	3	管野定三さん関係資料	管野サトさん提供
31	千人針	1	松崎寿吉さん関係資料	松崎香苗さん提供
32	お守り袋	1	松崎寿吉さん関係資料	松崎香苗さん提供
33	お守り	4	松崎寿吉さん関係資料	松崎香苗さん提供
34	簡易髭剃り	1	松崎寿吉さん関係資料	松崎香苗さん提供
35	財布	1	松崎寿吉さん関係資料	松崎香苗さん提供
36	鏡	1	松崎寿吉さん関係資料	松崎香苗さん提供
37	軍隊手帳	1	松崎寿吉さん関係資料	松崎香苗さん提供
38	ハガキ	6	松崎寿吉さん関係資料	松崎香苗さん提供
39	名刺入れ	1	土田正忍さん関係資料	土田廣志さん提供
40	名刺入れに入っていた写真	6	土田正忍さん関係資料	土田廣志さん提供
41	お守り入れ	1	土田正忍さん関係資料	土田廣志さん提供
42	お守り	2	土田正忍さん関係資料	土田廣志さん提供
43	ハガキ	2	Hさん関係資料	個人提供
44	ハガキ	8	西村浅吉さん関係資料	西村宏一郎さん提供
45	手紙	2	西浦一ゑさん関係資料	西浦一ゑさん提供
46	写真	1	西浦一ゑさん関係資料	西浦一ゑさん提供
第3章　母へ				
47	ハガキ	9	村上順治さん関係資料	村上ときゑさん提供
48	ハガキ	3	USさん関係資料	個人提供
49	勲八等白色桐葉章	1	USさん関係資料	個人提供
50	文机（引き出し内容物一式を含む）	1	髙橋亮一さん関係資料	髙橋正さん提供
51	筆立て	1	髙橋亮一さん関係資料	髙橋正さん提供
52	水彩画	3	髙橋亮一さん関係資料	髙橋正さん提供
53	手紙	4	髙橋亮一さん関係資料	髙橋正さん提供
54	遺書	1	髙橋亮一さん関係資料	髙橋正さん提供
第4章　故郷のたより　帰郷のいのり				
55	お守り袋・お守り	一式	Kさん関係資料	個人提供
56	お守り袋・お守り	一式	KHさん関係資料	個人提供
57	「故郷の便り集」（ハガキ・手紙）	一式	Gさん関係資料	個人提供